亡国の姫君

須賀　隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国の姫君

【Ｎコード】

Ｎ６８５０Ｑ

【作者名】

須賀　隆太郎

【あらすじ】

王族のみに魔法を使う能力が代々受け継がれてきたこと以外はごく普通の国として栄えてきたアルペンハイム王国。その、平和に暮らしていた王国を、突如魔族率いる魔王軍が侵略し、王国は滅亡した。その際、国王の機転で生き延びることができた王女ベアトリーセと、その騎士ブルクハルトは、惨い殺され方をした国王たちの仇を討つため、魔王軍と戦う旅に出るのだった。

01．プロローグ

新暦３４１年、アルペンハイム王国第１２代国王アルベルトの時代。王国の首都アルペムの街は、現国王アルベルトの唯一の子である王女ベアトリーセの１７回目の誕生日を３日後に控え、早くも祝賀ムードに沸いていた。アルペンハイム王国では初代国王アルブレヒトの直系の者ならば、男女を問わず１７歳の誕生日を迎えると同時に王位継承権を得ることができ、その際に複数の継承権保持者がいる場合には、全員が継承権を得た後にその中から当代の国王が指名して決める慣習もある。また、王家には代々魔法を扱う能力が備わっており、王家の人間の誕生日に行われる祭りの中で、王家の威光を示すという名目のもとに庶民もアルペンハイム王国の国民であるか否かに関わらず、生で魔法を見ることができるため、それを一目見ようと、世界各地から人が集まってきているのだ。

現国王アルベルトは平和主義者で有名な国王で、彼が即位した２５年前を境に、世界中の国々と和平条約を結び、戦争のない平和な国を実現させていた。また、各国首脳もその手腕を高く評価し、アルペンハイム王国は国際会議の場である国家連合の中心となっていった。

しかし、その平和はある日突然終わりを告げることになるのだった――

人間界とは別の次元にある世界――魔界。そこは、長きにわたっていくつもの勢力が覇権を競い合う、戦乱の時代が続いていた。だが、ある時それまで仕えていた主人を殺して下剋上した若き魔族の男、ヴォルフリートが急激に勢力を伸ばし、その版図を広げていった。これに対し、ヴォルフリートとほぼ時を同じくして勢力を伸ばし、“力のヴォルフリート・知のフリードリヒ”と称されるほどの

頭脳派魔族、フリードリヒがヴォルフリートに魔界の統一をかけた決闘をもちかけた。
戦いは熾烈さを極め、2人の戦いで魔界にあるいくつもの街や村が消滅した。そして――
「これで、終わりだ」
数ヶ月にわたった戦いを制したのは、ヴォルフリートだった。フリードリヒもその知性をフル回転させてヴォルフリートの猛攻を幾度となく防いでいたが、最後は純粋な魔力（ちから）の差を見せつけたヴォルフリートが、ゼロ距離の魔力砲でフリードリヒの肉体（からだ）を撃ち抜いたのだった。
「ぐはっ！　……くっ、俺の負けだ。さあ、殺せっ！」
フリードリヒは地面に倒れこんで負けを認めると、自らを見下ろすヴォルフリートにトドメを刺せと告げた。しかし――
「トドメは刺さぬ。貴様はもはや瀕死だ。いまここで私がトドメを刺さずとも、そう長くは生きれまい。ならば最期の時まで好きにするがいい。――私は、魔界だけでなく人間界も手に入れてみせよう。いまこの瞬間から私は“魔王”を名乗り、人間界をも制覇する。さらばだ、我が戦友（とも）、フリードリヒよ」
ヴォルフリートはフリードリヒにトドメを刺さず、人間界を制覇すると言い残してその場を立ち去った。と、ヴォルフリートが見えなくなった直後、
「フリードリヒ様っ！」
近くの岩陰から飛び出してきた配下の魔物がフリードリヒに駆け寄り、その傷を癒すため回復魔法をフリードリヒにかけた。
「助かったぜ、ゲルト。ふん、ヴォルフリートめ、この俺にトドメを刺さなかったことを後悔するんじゃねえぞ……」
フリードリヒは立ちあがると、ヴォルフリートの後を追って、人間界へ向かおうとしたが、ゲルトが彼の前に回りこんでそれを止めた。
「フリードリヒ様、恐れながら申し上げますと、あなた様の傷はわ

たしの魔法で一見すると回復してはおりますが、ヴォルフリートに手ひどくやられたダメージを完全に回復することはできず、特に身体の内側はほとんど回復魔法を受け付けないほどボロボロになってしまっており……おそらく、もう治ることはないでしょう。そのような状態でヴォルフリートの後を追えば、間違いなくお命を落とされてしまいます。それでも……それでも行くのですか？」

ゲルトは言外に「行くな」という意思を込めて、フリードリヒの身体の現状を伝えた。しかし……

「そうか、やはりな。さすがに自分の身体の事は自分が一番よくわかるさ。もちろん、ヤツの後を追えば、間違いなく死ぬだろうってことも理解してる。でもよ、ゲルト。たとえ命を落とすことになろうとも、やらねばならぬときってもんが必ずあるんだよ。俺にとっては、今がその時だ。――さらばだ、ゲルト。元気でやれよ」

フリードリヒは特に驚いた様子も見せずに頷いたが、それで立ち止まることはなく、静かにゲルトに別れを告げて、魔界を後にした。

「ああ、フリードリヒ様……どうかご武運をお祈り申し上げます」

その姿を見送ったゲルトの目には、一筋の涙が伝っていた。

０１．プロローグ（後書き）

お久しぶりです。
だいぶご無沙汰しておりましたが、ようやく帰ってまいりました。
今作はかなり王道的なファンタジーで、毎週日曜の０時更新で第１８話まではやっていきます。第１９話以降については、現在（２０１１．２．６）まだ出来上がってないので、第１８話の更新までにある程度書きためられなかった場合は、しばらく休載ということになります。一応、それまでに間に合うように頑張るので、よろしくお願いします。

02．王国の最期

王女ベアトリーセの誕生日まであと2日。より一層盛り上がるアルペムの街を突如として魔物が襲撃し、街は炎上した。

「キャアーーーーッ！」

「ぐはぁっ！」

逃げ惑う人々を、魔物たちが襲って次々に殺していく。すぐさま街の警備兵と王城からの応援が駆けつけて戦いに入るが、魔物の数は増える一方で、武器を持っている兵たちでさえ抑えきれずに倒れていった。

「な、何事だ！」

一方、アルペンハイム城にも魔物はたどり着き、また窓から突入してきた魔物もいたために城内のあちこちで戦闘が始まっていた。国王の謁見の間に傷を負った兵が入ってきたのを見て、アルベルトが慌てて立ちあがりながら兵に訊ねた。

「し、正体不明の魔物どもが大挙して首都アルペムの街、そしてわがアルペンハイム城を襲ってきました！　敵の数は圧倒的で、このままでは……ともかく、陛下たちだけでも安全な場所へ！　ここは我々で時間を稼ぎますので！」

兵はこれまでの状況をアルベルトに伝え、アルベルトに逃げるよう訴えた。

「バカモノ！　兵が闘っとるのに王たるわしだけ逃げ出せるか！行くぞ！」

しかし、アルベルトは兵を一喝すると、玉座の後ろに保管してあった国宝の剣を手にして出陣を決めた。

「お待ちください、陛下！　先に私が行きます！」

そこに駆け込んできたのは、代々アルペンハイム王国に仕えてきた騎士の家系の少年、ブルクハルト＝コルネリウスだった。ブルクハルトは騎士としての使命感から、国王より先に戦いに出ると訴え

た。
「ブルクハルトよ、そなたはこれまでよくわしたちに仕えてくれた。だが、そなたはまだ若い。よって、そなたにはわしの娘、ベアトリーセの護衛をしてもらいたい。2人でこの城の地下室の倉庫に隠れるのだ。倉庫は中から錠をかければ、すぐに壊されることはない程度には頑丈に作ってある。そのスキに、秘密の通路よりこの城を出るのだ。秘密の通路のことは知っておるな？　おそらくここで魔物を迎え撃つわしらは生き残れまいが、ベアトリーセには王家に代々伝わってきた魔法の力が、そなたには剣術の才能がある。どうかこの場は生き延び、いつの日か平和を取り戻してほしい」
　アルベルトは首を振ると、涙を流しながらブルクハルトに王女ベアトリーセの護衛をして地下室に避難するよう命じた。
「陛下……承知いたしました。このブルクハルト、命に代えてもベアトリーセ王女殿下を護ってみせます。では、殿下……」
　ブルクハルトは王の覚悟をその眼に刻み、敬礼をしてベアトリーセのもとへ歩み寄ろうとした。
「お、お父様っ！？　いやですっ！　わたくしも一緒に戦いますわっ！」
　しかし、肝心のベアトリーセが涙を流して父王アルベルトのマントにしがみついた。
「ベアトリーセよ。我が国の初代国王アルブレヒトの母と伝えられる、偉大なる魔女ベアトリーチェの名をいただいたお前にはわしとは比べようもないくらい強力な魔力が備わっている。だが、今はまだそれを完全には使いこなせていない。だから、今は隠れて逃げて、生き延びるのだ。いつの日か、どんな敵も倒せるくらい強くなるだろう。もしここでお前もともに戦って命を落としてしまったら、この国の滅亡だけでは済まなくなる。わかって……くれるな？」
　アルベルトは泣きつくベアトリーセを諭した。
「お父様……」
　ベアトリーセがアルベルトの羽織っているマントの裾を離すのと、

謁見の間にたくさんの足音が近づいてくるのはほぼ同時だった。
「む、どうやら時間がないようだ。済まぬが2人を地下室に強制転送する。ブルクハルトよ、ベアトリーセのことを頼んだぞ」
「あっ、お父様、わたくしの杖――」
アルベルトは時間がないことに気づき、ブルクハルトとベアトリーセに転移魔法をかけて謁見の間から避難させた。その際にベアトリーセはアルベルトに何かを言おうとしたが、最後まで言いきれずに謁見の間から姿を消した。その直後、扉が轟音とともに破壊され、魔物たちが大挙してなだれこんできた。
「キシシ、貴様が国王だな？　その首、もらったぁ！」
先頭にいた魔物がアルベルトに向かって突撃し、携えた鎌でアルベルトの首を狙った。
「少し衰えたとはいえ、このアルベルト＝フォン＝アルペンハイム12世、まだまだ貴様ら雑魚ごときに遅れはとらんわぁっ！」
アルベルトは素早く剣を抜くと、向かってくる魔物を一刀両断した。
「キ、キ……」
身体を真っ二つにされた魔物はそのまま倒れ、灰と化して消滅した。
「か、かかれーっ！」
それを見た残りの魔物が別の魔物の号令とともに一斉にアルベルトに襲いかかる！
「……」
だが、アルベルトは全く焦りを見せない落ちついた表情で、何かをつぶやいた。すると、アルベルトの剣から炎が巻き起こり、刀身を紅に染めていった。
「ま、魔法剣だとぉ！？　人間のくせに、小癪な！」
先ほど号令をかけていた魔物がアルベルトが何をしたのかに気づいて驚きの声をあげたが、気づいたところでいまさら動きを止められるわけもなく、そのまま突撃した。

「はぁっ！」
対するアルベルトは気合一閃、炎の魔法が宿った剣を振って接近していた魔物を斬っただけにとどまらず、振り下ろした際に剣から炎が放たれ、後方にいた魔物も含めて謁見の間に侵入した魔物を全滅させた。
「ほう、見事だ。人間にしてはよくやった、と褒めてやろう」
そこに悠々と現れた長身の魔族がその場に存在しているだけで放つ威圧感に、兵士は腰を抜かし、アルベルトでさえ立っているのがやっとだった。
「そなた、只者ではないな。何者だ？」
全身汗だくになりながら、アルベルトが問いかけた。
「私の名は“魔王”ヴォルフリート。自己紹介したばかりで申し訳ないが、お前には私が人間界をも制覇するという野望のため、死んでもらう」
ヴォルフリートは名を名乗ると、この部屋にいる人数――国王アルベルトと兵が4人の計5人――分のビーム状にした魔力弾を放った。
「ぐ、ぅ……っ！」
とっさにアルベルトは全員を守るバリアを張ったが、ヴォルフリートの圧倒的な魔力によって、ただ魔力を圧縮しただけのビームでさえその殺傷能力は並ではなく、アルベルトの魔力では耐えることすら困難で、バリアの厚みが見る見る薄れていく。
「しょせん人間ごときの魔力で我ら魔族に勝てると思うな！」
しかも、どうやらヴォルフリートは威力を抑え目にして放っていたらしく、言葉とともに威力が跳ね上がり消えかかっていたアルベルトのバリアはパリン、という儚い音とともに破壊された。バリアを貫いた魔力弾はその際にわずかばかり威力が弱められたが、完全に相殺されることはなく、次の瞬間にはアルベルトたち5人の胸を貫いていた。
「かはっ……！」

「ギャッ！」
「げふぅ……っ！」
「ぐえっ！」
「うぐぅ……へ、陛下……み、みんな……」
アルベルトをはじめほぼ全員が一撃で心臓を撃ち抜かれて即死だったが、兵士の1人だけ急所を外れたのか、瀕死ながらもまだ生きていた。
「ほう、とっさに身体をひねって急所を避けたか……だが、結局は苦しみが増すだけだったな。いま楽にしてやろう」
ヴォルフリートは手のひらに火球を生み出すと、生き残った兵士に向けて投げつけた。
「ぬわああ――――っ！」
今度こそ避けきれなかった兵士はあっという間に炎に包まれ、燃え尽きた。

一方、地下室に強制転移させられたベアトリーセとブルクハルトは――
「いくらお父様のご命令だとはいえ、民を守るべき王家の王女ともあろう者がこのようなところで隠れて皆が殺されていくのを黙って見過ごすことしかできないなんて……」
地下室の壁に寄り掛かって、ベアトリーセが泣いていた。
「殿下、ここは耐えるのです。国王陛下のおっしゃったとおり、殿下には類稀なる魔法の才能がございます。もしもここで殿下を失えば、それはすなわち我々人類が魔王軍に対抗する術をも失うことと同じです。つらいのはお察しいたしますが、明日のために今日の屈辱を受け入れましょう」
ブルクハルトも拳を堅く握りしめながら、ベアトリーセを諭した。
と、その時。2人の目の前に突如として映像が映し出された。

０３．魔王軍、宣戦布告す

「全世界の人間どもよ、私が魔力で送っているこの映像が見えているかね？　私の名は魔王ヴォルフリート。本日は、諸君にいいものを見せてやろう。――これを見たまえ」

映像を全世界に送信したのは、ヴォルフリートだった。その手に持った物を高々と掲げ、「見ろ」と促したのは、アルペンハイム国王、アルベルトの首だった。おそらく一瞬のうちに命を絶たれたのだろう、その表情は驚愕に満ちたものであった。

「お、お父様……」

父の死だけでなく、そのあまりに惨たらしい姿に、ベアトリーセは気を失った。

「殿下っ！」

ブルクハルトは崩れ落ちるベアトリーセを受け止めて抱きかかえると、倉庫として使われていた地下室の片隅に放置してあった寝具の上に横たえた。

一方、同じようにアルベルトの首を見せつけられた各地では、民衆の混乱が巻き起こっていた。また、アルベルトは世界の国家連合の中心的な存在だったので、各国首脳への衝撃もかなりのものであったが、慌ててもアルベルトの死が覆るわけではないと意外と早く冷静さを取り戻し、ヴォルフリートの次の言葉を待った。

「我々魔王軍は、いまこの時をもって諸君ら人間が住むこの世界全てに宣戦を布告する！　アルペンハイム王国を襲い、滅ぼしたのは我々の意思を明確に示すためと、この地上における拠点とするため。これからは配下の魔物を全世界に放ち、侵略を開始するゆえ、ムダな抵抗は死を早めるだけだと覚えておくがいい」

ヴォルフリートは大胆にも全世界に対して宣戦布告をしてきた。これに対し、国家連合でアルペンハイムに次ぐ発言力を持っていたフェアフォックス王国が各国首脳に緊急会談を持ちかけ、どこの国

からも訪れやすい、世界の中央に位置する島国、エリュアールの王都ホルッターにて会談が開かれることになった。
　会談に集った、アルペンハイム以外の世界１０ヶ国の首脳たち。アルペンハイムのすぐ西に位置するフィドル共和国。アルペンハイムやフィドルの北に位置する島々を統治するバウムガルト王国。会談の会場となったエリュアール王国。エリュアールのさらに南に位置する大陸全土を治めるベリオス帝国。東の大陸北部に位置する観光立国アルファーノ王国、中央部の山岳地帯に位置するカレーナ共和国、南部の大国フェアフォックス王国。そして、西の大陸北部に位置する発展途上のサナルス共和国、中部の鉱山国家バヤール公国、南部の産業国家アロニス王国。
「さて、今の我々が話し合うべきことはただひとつ。アルペンハイム王国を壊滅させ、世界全てに挑戦状を叩きつけてきた、魔王ヴォルフリートとやらへの我々の対応だ。まずは皆さんのご意見を伺いましょう」
　まず、会談を呼びかけたフェアフォックス王国の国王、マウリツィオ＝エト＝フェアフォックスが一同の顔を見渡して言った。
「わたしは敵方の戦力が不明なうちは、兵の無駄死にを防ぐためにも防衛に徹するほうがいいのではないかと思いますが」
　カレーナ共和国の大統領、フランチェスカ＝アレティーノがまず専守防衛論を出した。
「いや、敵方の戦力がわからないといって、守るだけではジリ貧だ。むしろ魔王に先制攻撃を仕掛けようではないか」
　すると、アロニス王国の国王、セドリック＝エル＝アロニスが即座に立ちあがって反論した。
「そうは言いましても、セドリック殿。相手は我々にとっては未知の存在である魔法を扱えるあのアルペンハイム王国をいとも簡単に壊滅させてしまったのですよ？　それほどの実力を持っている上に、人間ではない彼らはアルペンハイム以上に我々の想像もつかないような何かを持っている可能性だってあるわけですから、今は守りに

徹して兵を無駄に失わないほうが大事ではないですかな？」
　すると、アロニスの北に位置する鉱山の国、バヤール公国の大公、クロード＝ボルテールが横槍を入れた。
「うっ、ぐぅ……」
　正論で返されて言葉に詰まるセドリックだったが、
「アルペンハイムとて無敵ではないでしょう。一国の兵力ではアルペンハイムが頭一つ抜け出ていたとはいえ、我々には団結し、連合軍を結成して戦うという方策もあるのです。フランチェスカ大統領、それとクロード師。それらの可能性を考慮に入れずに守りに入っても、セドリック王の言うとおりジリ貧になるだけでは？」
　そこへフェアフォックスのマウリツィオが援護に入った。
「いや、しかし……」
　国家の枠組みを飛び越えた連合軍という考えに、今度は逆にフランチェスカとクロードが言葉を濁した。
「マウリツィオ殿。このままでは話がまとまりそうにない。よって、攻撃か防衛か、決を採ってしまえばいかがでしょう？　無論、どちらに決まろうとも我ら国家連合はその決に従う、という大前提のもとに、ですが」
　そう提案したのは、フェアフォックスやカレーナがある大陸のもう一つの国、美しいビーチなどがあり、それらを中心とした観光に力を注ぐアルファーノ王国の国王、アーノルド＝ディノ＝アルファーノであった。
「うむ、それはいい提案ですな。では、皆さんもそれで良いですかな？」
　マウリツィオはアーノルドの提案に大きく頷くと、これまで発言していない国の代表も含めて訊ね、全会一致で決議に進んだ。
「では、連合軍を組織してでも抗戦するという方は、起立願います。……アロニス王国、バウムガルト王国、ベリオス帝国、アルファーノ王国、サナルス共和国、そしてわがフェアフォックス王国。６ヶ国と多数を占めるようですので、我々国家連合としての答えは、抗

戦という決議にいたします。さきほどアーノルド殿がクギを刺したので大丈夫だとは思いますが、異論はないですね？」
　マウリツィオは決議の結果を見て、防衛派――バヤール公国、エリュアール王国、フィドル共和国、カレーナ共和国の首脳たちに訊ねた。
「ええ、仕方がありませんね。ですが、その連合軍にわたしたちカレーナの民は参加しません」
　防衛派の各国が決議の結果に押し黙ってしまう中、最初に防衛論を出したカレーナ共和国のフランチェスカ大統領が連合軍への不参加を表明した。
「なっ！？　フランチェスカ殿、それは本気で言っておられるのか！？　抗戦の決議が出た以上、各国が参加して連合軍を組織しなくてはならないのに、いきなり足並みを乱すおつもりか！」
　抗戦派のベリオス帝国を統治する、皇帝マリアーノ＝フィル＝ベリオスが驚いて立ち上がりながら訊ねた。
「話は最後まで聞くものですよ、マリアーノ。わたしたちが参加しないのは連合軍の前線部隊であって、物資の補給など、後方支援にはきちんと参加いたしますわ。そのあたり、誤解なきよう」
　対するフランチェスカは全く取り乱した様子もなく、極めて冷静にマリアーノに告げた。
「そ、そうであったか。いや、早とちりをして申し訳ない」
　マリアーノは勘違いを謝罪し、再び席に着いた。結局、防衛派の４ヶ国は前線部隊には参加せず、後方支援として入ることを表明し、会議は幕を下ろした。

０４．旅立ち

「ん……」

気を失っていたベアトリーセが目を覚ますと、ブルクハルトが地下室の中から、これからの旅に使えそうな物を集めていた。

「あ、殿下！　気がつかれましたか！」

ブルクハルトはベアトリーセが目を覚ましたことに気づくと、一旦手を止めてベアトリーセが起き上がるのを手助けした。

「ありがとう、ブル。それで、魔王軍は、お父様の首を見せつけて一体何を言ってきたの？」

ベアトリーセは寝具の端に腰かけると、ブルクハルトに訊ねた。

「はっ、魔王ヴォルフリートは全世界に対し宣戦布告し、各国に配下の魔物を差し向けると言い放ちました。殿下、いかがいたしますか？」

ブルクハルトは先ほどヴォルフリートが告げたことをベアトリーセにも伝えた。

「そう……でも、この件に関して、今のわたくしでは政治的な面から干渉することはできないわ。いずれはお父様の跡を継いで国王に即位する予定だったとはいえ、まだ１７歳になっていないわたくしには王位継承権が発生していないのですから。なので、政治的な対応はフェアフォックス王国のマウリツィオ王にお任せするとして、わたくしたちはわたくしたちにできること――政治的な関わりは持てずとも、お父様を殺した魔王ヴォルフリートを倒す――をしましょう。ブル、旅立ちの支度はできているのかしら？」

ベアトリーセはブルクハルトが話した内容に表情を曇らせたが、元とはいえ一国の王女だった者として現在の自分の立場をわきまえているらしく、父王アルベルトの最期の言葉に従って魔王を討伐するための修行の旅に出ることを決意し、ブルクハルトに準備の状況を訊ねた。

「はっ、わずかばかりの食糧程度しかありませんでしたが、この地下室にあるもので使えそうなものは用意できております。すぐに出発されますか？」
　ブルクハルトは地下室に置いてあった保存食をありったけ詰め込んだバッグを抱えながら、ベアトリーセに訊ねた。
「そうね、すぐにでも……と言いたいところではあるのですが、ねえ、ブル？　平民が着るような服なんてものは置いていなかったかしら？」
　ベアトリーセは一国の王女だけあり、当然その服装は豪華なドレス姿だ。アルベルトによって地下室に強制転送されたり、意識を失って古ぼけた寝具に寝かされたりしているために多少煤けてはいるものの、その美しさは全く褪せてはいなかった。王女としての生活だけならば、このような豪華なドレスがあれば何も困ることはなかったであろうが、もはや王女としての生活は望めなく、これからはブルクハルトと2人で街から街へ旅する根無し草のような生活になるのだ。しかも道中は魔王軍の魔物たちとも幾度となく戦っていかねばならないだろう。そうなればドレスより動きやすい平民服のほうがいいのは当然であった。しかし、街中にある一般国民の家ならいざ知らず、ここは王宮の倉庫代わりになっていた地下室である。そんな都合よく行くはずがない。
「申し訳ありません、殿下。ここにはそのようなものは残念ながらございません」
　ブルクハルトが心底申し訳なさそうにベアトリーセに伝えると、
「そう。ないものは仕方ないですわね。では、道中のどこかで手に入れましょう。それまでは、このドレスを着用してることにいたしますが、ブル。ちょっと、剣を貸してもらえないかしら？」
　ベアトリーセはブルクハルトが腰から下げている剣を貸すよう求めた。
「はっ、剣ですか？　か、かしこまりました」
　ブルクハルトは一瞬戸惑ったが、すぐに腰のホルダーから剣を抜

くと、そっとベアトリーセに差し出した。
「ありがとう、ブル。では……」
ベアトリーセは剣を受け取り礼を言うと、おもむろに剣を振るってドレスの裾を切っていった。１０分と経たずに足元まで覆っていたドレスは動きやすそうな長さにまでカットされ、ベアトリーセは満足そうに剣をブルクハルトに返した。
「うん、こんなものかしら。では、そろそろ行きましょう。……上のほうで大きな音がしているけれど、何が起こってるのかしら？」
ベアトリーセはブルクハルトに出発することを告げたが、不意に城の地上部分から大きな音が響いてきて、怪訝そうな表情になった。
「承知いたしました。では、参りましょうか、殿下。地上で何が起こっているかは、外に出れば自ずとわかります。まずは安全にこの、魔王軍に占拠された城を脱出することを考えましょう」
ブルクハルトは食糧などが入ったバッグを改めて背負うと、地下室の奥にある石壁の隙間に手を突っ込んだ。カチリ、と小さな音がしたかと思った次の瞬間、そこの壁が動き、隠されていた通路が出現した。
「まあ、このようなところに通路があったのですか！？　わたくし、初めて知りましたわ！」
ベアトリーセは感激した様子で言った。
「殿下がご存知ないのも無理ありません。陛下は知っておられたようですが、王女殿下ともあろうお方がこのような薄汚れた地下室になどお近づきになるはずがありませんからね。この通路は、父に聞いたところによれば、父の代よりはるか昔から存在しており、有事の際にはここを通って城を脱出できるよう作られたそうですが、まさかこのような形で使うことになるとは……」
ブルクハルトは通路を先導しながら、通路の由来をベアトリーセに話した。そのまま2人とも無言で通路を進み、やがて終点にたどり着いた。終点には、３段ほどの階段が設置されており、天井部分の石の隙間からわずかに光が見えた。

「よっ……と」
ブルクハルトが軽く力を入れて天井の石を押し上げ、周囲の様子をうかがうと、幸いなことに周囲には何もいなかったので、そのまま石を投げ飛ばすようにして外に出た。すぐに後に続くベアトリーセの手を取って脱出の手助けをし、2人は無事にアルペンハイム城から脱出することができた。
「あれは……ああ、美しかった街が、城が、あのような無残な姿に……」
脱出した場所はアルペムの街はずれにある小高い丘の上。そこからアルペムの街やアルペンハイム城を見渡した2人は、大きなショックを受けていた。石造りが美しかった城の外壁、そして同じ材質で造られた美しい石畳で有名だったアルペムの街。いずれもその面影はなく、街は完全な焼け野原、そしてアルペンハイム城は禍々しい雰囲気を醸し出す魔王城へとその姿を変えていた。
「ブル、わたくしはここで誓いますわ。必ずや強くなって、アルペンハイムの国から、いえこの世界から魔族を追い出し、国を再建すると。ブル、あなたはもはや王女ではないわたくしについてきてくれるかしら？」
ベアトリーセは遠くに見える魔王城と化したアルペンハイム城を見つめて、決意をブルクハルトに伝えたが、不意に不安そうな表情になって訊ねた。
「ベアトリーセ王女殿下、私は殿下の剣であり、また盾であります。たとえ仕えるべき主君を失っても、主たる国王陛下の最期の言葉に従い、このブルクハルト＝コルネリウス、騎士として全身全霊をかけてベアトリーセ王女殿下をお守りさせていただきます」
ブルクハルトは腰のホルダーから剣を抜いてベアトリーセに差し出すと、跪いて改めて忠誠を誓った。
「騎士ブルクハルト＝コルネリウス。そなたをわたくしの守護騎士に任命します。……では、行きましょう」
「はっ、仰せのままに、王女殿下（マイプリンセス）」

――かくして、国を滅ぼされた王女とその騎士の戦いの旅路が幕を開けるのだった。

「魔王様、本当によろしいのですか？」
「何がだ」
「王家の生き残りのことです。先ほど城を脱出した模様ですが」
「ああ、放っておけ。今の状態では殺しても何も面白くない。生き残ったのは王女と兵士が１人だな？　父である国王を殺された王女がどこまで強くなれるのか、試してみるのも一興であろう」
「はっ、承知いたしました。……と、どうやら別のお客様がいらしたようですよ、魔王様」
　なんと、魔王軍はベアトリーセたちの存在に気づいていて、わざと見逃していた。元はアルベルトが座っていたはずの玉座に腰かけ、優雅に果実酒を飲みながら、ベアトリーセたちがどこまで強くなれるか試してやると言うヴォルフリートの顔は、悪魔そのものだった。
「ふむ、命知らずどもめ。よかろう、我ら魔族の恐ろしさを思い知らせてやれ！」
　ヴォルフリートはグラスに半分ほど残っていた果実酒を一気に飲み干すと、立ち上がり、部下に命令を下した――

０５．連合国軍、壊滅

フェアフォックス王国やアロニス王国を中心とした６ヶ国、総勢２０万人にも及ぶ連合国軍の前線部隊は、もとはアルペンハイム城だった魔王ヴォルフリートの居城を目指して怒涛の勢いで進軍していた。もちろん、魔王軍も応戦してはいるものの、有象無象の魔物たちでは連合国軍の破竹の勢いを止めるには至らなかった。

「諸君、このまま魔王城に乗り込んで魔王の首を取るぞ！」

前線部隊の総司令官に任命されたフェアフォックス王国軍所属のフランコ＝オネスティは苦もなく魔王軍を蹴散らしているのをいいことに、鼻息も荒く後に続く兵たちに叫んだ。

「妙ではありませんか、フランコ総司令官どの？　あのアルペンハイムをたった半日で壊滅させたにしては、やけにあっさりしすぎているような気がするのですが……」

そんなフランコを諌めるように横槍を入れたのは、副司令を務めるアロニス王国軍所属のフレデリック＝アルバートルだった。

「ははは、何を言うのかね、フレデリック副司令。いくらアルペンハイムが強かったと言ってもそれはあくまで一国の軍勢で見た場合の話であり、今の我々は国家の枠を超えて集った連合国軍だ。むしろ勝って当然、ではないのかね？」

フランコはフレデリックの心配を一笑に付し、進軍を止めようとはしなかった。と、そのとき。

「勝って当然、か。我々もずいぶん甘く見られたものだな」

アルペムの街はずれに差し掛かろうとしていた連合国軍の前に、突如魔王ヴォルフリート自らその姿を見せた。

「魔王自らお出ましとは、こちらにとって好都合。その首、いただくぞ！」

フランコはいきなりの魔王との遭遇にも動じず、剣を構えてヴォルフリートに斬りかかった。しかし、剣はヴォルフリートをすり抜

け、ダメージを与えることはできなかった。
「くっ、幻か！　おのれ、どこだ！？　出てこい、魔王！」
フランコが悔しげにヴォルフリートを探すが、そこへ――
「ふはははは、貴様ら人間ごときを殺すのにヴォルフリート様が自ら出てくるとでも思ったか？　バカめ、１０００年早いわ！」
明らかにこれまでとは違う雰囲気を持った３体の魔族がフランコたち連合国軍、２０万の軍勢の前に現れた。
「ヴォルフリート様親衛隊が１人、爆炎将軍イグニィド！」
「同じくヴォルフリート様親衛隊、氷結将軍ブルーザーよ」
「雷光将軍サランドだ。偉大なるヴォルフリート様の降伏要求に従わぬとは、なんと愚かな……」
どうやら魔王軍の幹部クラスらしい３体の魔族は名乗りを上げると、フランコたち２０万の軍勢に対し、“かかってこい”と言うようなジェスチャーをして挑発した。
「うおおおおおお、覚悟ォ――――！」
その挑発に乗るようにしてフランコと、およそ１００名ほどの勇敢な兵士が一斉に３体の魔族に斬りかかった。挑発をしておきながら、３体とも完全な無防備で、フランコは勝利を確信していた。しかし、フランコをはじめ、１００名の兵士の剣や槍などの武器はイグニィドたちの身体に当たりはしたが、斬り裂くことはできずに全て真っ二つに折られてしまった。
「バ、バカな……！　完全に無防備だったはず……！」
折れてしまった剣を見てフランコは呆然となっていた。
「ククク、冥土のみやげに教えてやろう。おれたち魔族の肉体は貴様ら脆弱な人類などと違って頑丈でね、生半可な攻撃じゃビクともしないどころか、このように攻撃した武器が壊れておしまい、ってわけだ。――残念だったな」
イグニィドは呆然自失となっているフランコの頭を掴むと、攻撃が通用しなかった理由を教え、絶望的な表情になったフランコに対し口から炎を吐いて一瞬のうちに焼き殺した。フランコと一緒に斬

りかかった他の兵士も、ある者はブルーザーの凍気で氷漬けにされて粉々に砕かれ、またある者はサランドの稲妻で一瞬にして消し炭のようにされ、あっという間に１００名全て命を絶たれてしまった。
「く……これほどまでとは……諸君、やむを得ん、撤退するぞ！　私が殿（しんがり）を務めよう！　いまここで連合国軍としての任を解く故、後は各国の軍ごとに撤退をしてくれ！」
　総司令官のフランコを失ったことでパニックを起こし、統率が乱れかけた連合国軍だったが、まだ副司令のフレデリックがいる。だが、あまりに圧倒的な力の差に、これ以上戦いを続けても勝ち目はないと判断し、フレデリックは撤退を決断した。だが、２０万もの大軍勢が撤退するには時間がかかる。しかも目の前の敵に背を向けて敗走することになるため、誰かが生命をかけて殿を務めなくてはならない。フレデリックは、連合国軍の副司令として自ら殿を買って出ることにし、それによって司令官がいなくなる事態に対しては、連合国軍を解散することによって、各国の軍ごとに分かれ、各軍司令官の指示に従うよう命じた。
『副司令！　我らもお供します！』
　副司令フレデリックの最後の命令を受けて、各国軍が背を向けて撤退を始める中、フレデリックが所属するアロニス王国軍の一部が撤退する兵の流れに逆らうようにフレデリックのもとへ駆けつけた。
「お前たち……」
　フレデリックはこんな絶望的な戦いで殿を務めるという、まさに生命をかけた任務に誰の命令でもなく来てくれた部下たちに、目頭が熱くなった。
『副司令、いえ、アロニス王国軍司令官、フレデリック＝アルバートルどの！　我らはあなたのような上司に出会えて幸せでした！　最期まであなたとともに戦えること、誇りに思います！』
　対するフレデリックの部下たちも涙を流してフレデリックに敬礼をし、様子をうかがっていたイグニィドたちのほうへ向きなおった。と、その時。イグニィドたちの後方に何かが現れた。

「ヴォ、ヴォルフリート様っ！？　ここは我々親衛隊で十分だったはずではっ！？」
　まさかのヴォルフリート出現に、イグニィドたちのほうが戸惑っているようだった。
「うむ。確かに諸君ら親衛隊で十分ではあった。だが、私は彼らの勇気に感心した。その勇気を称え、褒美としてこの魔王ヴォルフリートの力を見せてやろうと思ってな」
　ヴォルフリートはイグニィドたちが左右に避けて開けた部分から悠々とフレデリックたちの前へ歩み寄りながら、出てきた理由を告げた。
（く……こいつが、魔王……っ！　なんて威圧感だ……先ほどの幻などとはケタが違いすぎる。う、動くどころか立っていることさえできなくなりそうだ……っ！）
　突如として出現した本物の魔王を目の前にして、フレデリックは腰を抜かすことはなかったが、戦闘態勢すら取れずに棒立ち状態、そして部下たちはすでに腰を抜かして立っていることさえできず、中にはあまりの恐怖感から失禁する者さえいた。と、フレデリックは不意に生き延びられる可能性を思いついたらしく、持っていた剣を手の届かない場所に向けて投げ捨てた。
「みんな、武器を捨てるんだ！　魔王ヴォルフリートとその親衛隊よ、我々はここに降伏する！」
“降伏すれば捕虜にはなるだろうが生命は助かる――”そう考えたフレデリックの放った予想外の一言に、腰を抜かしていた兵たちは驚いて一瞬戸惑ったが、すぐにその意図に気づいて、もともと手放しかけていた武器を自分たちの後方に投げ捨てた。しかし――
「今更、武器を捨てて降伏など、認めるとでも思っていたか？　この魔王ヴォルフリートに戦いを仕掛けたことを後悔するがいい！」
「――――――！」
　ヴォルフリートはフレデリックたちの降伏を受け入れず、武器を捨てて戦意のない彼らに右手を向けると、ほぼゼロ距離で魔力砲を

撃ち、フレデリックたちは悲鳴さえもかき消されて、骨すら残さず消滅させられてしまった。さらにその魔力砲の余波は撤退していた連合国軍約２０万人をも呑みこみ、一瞬にしてその命を奪い去った。

――かくして、戦いは連合国軍の惨敗というだけでなく、各国軍の精鋭が全滅するという最悪の結末になってしまった。

06．ヴァイセンへ

この戦いで連合国軍の前線部隊が全滅させられたことで、前線部隊に兵を送っていたアロニス王国、バウムガルト王国、ベリオス帝国、アルファーノ王国、サナルス共和国、フェアフォックス王国の6ヶ国はそれぞれが誇る精鋭兵をまるごと失った。その影響はすぐに現れ、実際に侵略を始めた魔王軍の魔物たちを相手に、後方支援のみをしていたバヤール公国、エリュアール王国、フィドル共和国、カレーナ共和国の4ヶ国では苦しい戦いを強いられながらも、どうにか追い払うことができていたのに対し、精鋭を失った6ヶ国は、領内にあるいくつもの村や町が壊滅し、もはやいつ滅亡させられてもおかしくないというほどボロボロの状況でしのいでいる、といった具合であった。もっとも、侵攻を防げている4ヶ国のうち、カレーナ共和国だけは、国土の大半が山岳地帯に位置しており、侵攻の勢いそのものが他国より緩やかであることも理由の一つとして挙げられるのだが。

一方その頃、ベアトリーセとブルクハルトは城から少し離れた、城に一番近い場所にある街ゲーゲンに通じる森の入口に立っていた。

「殿下、まずはどこへ行かれますか？」

荷物の中から地図を引っ張り出すと、ブルクハルトはベアトリーセに訊ねた。

「そうね……わたくしの杖が城に置いたままなので、できれば取りに戻りたいけれど……あっ！　ブル、確か“先生”の故郷ってヴァイセンの街だったわよね？」

ベアトリーセはアルペンハイム国領の西側に位置し、東側にあったアルペンハイム城からは徒歩では数日かかる距離にある街を指してブルクハルトに聞いた。

「ええ、確か15日ほど前に休暇をとってヴァイセンに里帰りされ

たまま、城に戻ってなかったと思いますから、まだヴァイセンにいるかもしれません。行ってみましょう」
ブルクハルトは力強く頷くと、“先生”の故郷の街、ヴァイセンに向かって歩き出した。
ベアトリーセが“先生”と呼んだ人物、エドガー＝デーメルは現在３５歳で、王家の血筋は引いていないが、母方の先祖に妖精（エルフ）がいたことで、少年時代から魔法を扱う能力を発現し、成人するころには王家の人間と遜色ない使い手になっていたことから、王家に破格の条件で召し抱えられ、少女だったベアトリーセに魔力の扱い方を指導してきた人物だが、つい先日父親が亡くなったため、休暇を取って故郷であるヴァイセンに帰郷していたのだ。しかし、戻らないままにアルペンハイムが魔王軍に滅ぼされてしまったので、２人はひとまず彼を頼ってヴァイセンへ行くことにしたのだった。
途中にある小さな宿場で休息を取りながら2日ほど歩き、ヴァイセンの街を目前にした川辺で2人が休息をとっていた、その時。２人の目の前に魔物が現れた。
「オイ、そこの人間。答えろ、貴様らは何者だ？」
剣を携えた魔物が切っ先をブルクハルトに向けて訊ねた。
「私は……貴様らに滅ぼされたアルペンハイム王国軍近衛部隊所属、ブルクハルト＝コルネリウスだ！　仲間たちの恨み、思い知れえっ！」
ブルクハルトは一瞬言葉を詰まらせかけたが、無惨に殺された国王や仲間たちの無念さに突き動かされたのか、居合い抜きのごとく一気に剣を抜いて魔物を斬り裂いた。
「バ、バカ……な……」
よもや反撃に出てくるとは思っていなかった魔物は、ガードする間もなく身体を真っ二つにされて息絶えた。
「ハア、ハア……まだだ、まだ完成じゃない……」
魔物を一刀のもとに斬り伏せたブルクハルトは、しかし納得していないようだった。

「すごいじゃない、ブル！　さすがは最年少で近衛部隊の副隊長まで出世しただけのことはあるわね！　……でも、何か物足りなさそうな顔をしているわね」
　ベアトリーセはまるで我がことのように喜び、ブルクハルトを褒め称えたが、彼の表情がわずかに曇っているのに気付くと、喜ぶのをやめて訊ねた。
「お褒めにあずかり光栄であります、殿下。しかし、まだ足りないのです。もっと剣を振る速度を上げなくては、私の理想には及ばないのです。……では、参りましょう。もうヴァイセンの街はすぐそこだったはずです」
　ブルクハルトは自らの理想の剣技のイメージを話すと、荷物を背負ってベアトリーセとともに再び歩き出した。と、そのとき。
「そこの人間ども、止まれ！」
　２人の頭上から何者かの声が聞こえたかと思った次の瞬間には、２人は１０体ほどの魔物に取り囲まれていた。
「よくもわが同胞を殺ってくれたな。しかも貴様ら、我ら魔王軍が滅ぼしたアルペンハイム王国の生き残りらしいじゃないか。ちょうどいい、同胞の仇討ちも兼ねてここでアルペンハイムの遺恨を断たせてもらおう」
　魔物の群れのリーダーと思しき魔物が、槍を短く持って穂先をベアトリーセに突きつけていた。
「くっ、お逃げください、殿下！　街はすぐそこです！」
　槍の穂先がまさにベアトリーセののど元を貫こうとした瞬間、ブルクハルトが剣を抜いて槍を弾き飛ばすと同時に包囲網に一瞬の穴を作ると、魔物がひるんだわずかなスキを突いてベアトリーセを突き飛ばし、包囲網の外側に放り出した。
「おのれ、ならばまず貴様から血祭りに上げてくれる！」
　槍を弾かれて怒った魔物がターゲットをブルクハルトに変更し、さらに他の魔物も自らの爪や牙などで一斉にブルクハルトに襲いかかった。

「ブル――――ッ！」
言われたとおりに街のほうへ走っていたベアトリーセは、後方で魔物の咆哮が聞こえた瞬間に思わず立ち止まってブルクハルトの名を叫んだ。と、その時。街のほうからオレンジ色に輝く光が走り、ベアトリーセのそばを駆け抜けていった。
「ぐおおおっ！？」
光は魔物のリーダーの背中に直撃すると、そこから一気に炎が燃え上がった。さらに、周囲の魔物たちにも炎は燃え移り、あっという間に１０体の魔物は灰になった。
「た、助かった……のか？　今のはいったい……」
あの包囲網の中でも必死に応戦していたブルクハルトは、あちこちに傷を負いながらもベアトリーセのいるところまで歩いて合流した。そこに現れたのは――

07．杖を求めて（前編）

「ふう、危ないところでございました。ベアトリーセ王女殿下、ご無事で何よりでございます」

街の入口から炎の矢を放って魔物を一掃した人物――エドガーはベアトリーセとブルクハルトのもとへ歩み寄ると、深々と一礼した。

「先生っ！」

ベアトリーセは感極まったようにエドガーに飛びかかるように抱きついた。

「で、殿下。落ちついてくださいませ」

エドガーは倒れそうになるのをなんとかこらえ、冷静にベアトリーセをやさしく引き離した。

「ありがとうございます、エドガーさん。おかげで助かりました」

ブルクハルトがそんなエドガーに歩み寄って礼を言うと、

「いや、僕は大したことはしていないよ。それよりも、殿下。魔王軍の襲撃の際に城を留守にしていたこの不忠者に何かご用でございますか？」

エドガーは仕えていた国王アルベルトを守れなかったことを悔やんでいるようで、自虐的な言い方をしてブルクハルトたちに訊ねた。

「先生は不忠者などではありませんわ。お父上が亡くなられたことによる正式な休暇を取得され、その間に起きてしまったことでどうして先生を責められますか。ですから、もうご自分で“不忠者”などと蔑むのはやめてください。それで、用件なのですが、わたくしたちは城が襲撃された際にお父様の転移魔法で地下室に避難させられたために、わたくしの寝室に杖を置き去りにしてきてしまい、これからの修行の旅の前に、途方に暮れていたのです。確か先生なら予備の杖を持っていたかと思い、こうして訪ねてきた次第なのですが……」

ベアトリーセはまず自分を不忠者と蔑むエドガーに対してそれを

きっぱりと否定し、それから用件を伝えた。
「申し訳ございません、殿下。僕が持っていた予備の杖も城の僕の寝室の中なのです。今回の帰郷に際し、父の葬儀の準備などで荷物が多く、やむなく予備の杖は置いてきてしまったのです」
エドガーは自分の杖も城内にあり、手元にはないと2人に告げた。
「そ、そんな……杖があるのとないのとでは魔法の威力が段違いなのに……どうしたら良いのかしら？」
期待を打ち砕かれ、がっくりとうなだれるベアトリーセだったが、不意にエドガーが手を叩いた。
「殿下、ひとつだけ方法がございます。ただ、これは僕ひとりの魔力だけでは足りないので、殿下にもお手伝い、というか魔力をお借りすることになりますが、よろしいでしょうか？」
「ええ、わたくしの杖を回収できるなら、構いませんわ。それで、具体的にはどのような方法なのですか？」
ベアトリーセは即座に頷き、エドガーに訊ねた。
「方法はいたって単純です。僕と殿下が、僕の転移魔法で城に潜入し、そこから殿下の寝室へ移動して杖を回収後、再び転移魔法で城を離脱する、というものなのですが、僕の魔力容量では転送魔法は消耗が大きすぎて、片道分しか使用できないのです。そこで、帰りは魔力を吸収する魔法を使い、殿下の魔力をお借りして転送魔法を使用する流れになるのですが、よろしいですか？」
エドガーは杖回収作戦の具体的な内容をベアトリーセに伝え、彼女に確認をした。
「ええ、承知しましたわ。では、すぐにでも参りましょう、先生」
ベアトリーセは即答すると、早く行きたいとエドガーを急かした。
「かしこまりました、殿下。では、参りましょう。ブルクハルト君は僕と殿下が街を離れている間、この街の護衛をしていてください。魔王ヴォルフリートの侵略方針で、この数日間で魔物の襲撃がたびたび起こっています。おそらく、先ほどの魔物たちもこの街を襲うためにやってきたのでしょう。では、お願いしますね……“転送（テレポート）”

！」
エドガーはブルクハルトに留守を頼むと、ベアトリーセとともに転送魔法を使用してアルペンハイム城に向かった。

一方、その頃――
「ほう……まだ生きていたか。それで、何の用だ、フリードリヒよ」
魔王城の謁見の間。奥の玉座に腰かけて各地の戦況報告を受けていたヴォルフリートのもとに、突如としてフリードリヒが乗り込んできたのだ。つい数日前のこととはいえ、完膚なきまでに叩きのめし、瀕死の重傷を負わせたにも関わらず、再び自分の目の前に現れたフリードリヒに驚きを隠すこともせずにヴォルフリートは訊ねた。
「何の用か、だと？　てめぇを倒しに来たに決まってんだろうが。俺がてめぇに会いに来る理由が、他にあるとでも思っているのか？」
フリードリヒは、ヴォルフリートの問いかけに不機嫌そうに顔を歪めて言い放った。
「大方そんなところだろうと思っていたが、念のため聞いておこう。フリードリヒよ、私の部下になるつもりはないか？　受け入れるなら、お前のその瀕死の肉体（からだ）を私の優秀な配下に命じて全快させてやってもいい。さあ、どうする？」
ヴォルフリートはまるで古典的な“魔王と、それに対峙する者”の会話を展開し、フリードリヒに訊ねた。もっとも、この場合、魔王に対峙する者もまた魔族な上、魔王の提案を受け入れる褒賞として示されたものも、よくある‘世界の半分’などではなく、瀕死の状態であるはずのフリードリヒの回復、というものであったが。それに対し、
「ハッ、この肉体が全快するとしても、その代償にてめぇの配下になるくらいなら、俺は迷わず死を選ぶぜ。正直、笑うだけでも身体が痛（いて）ぇんだから、あんまり笑わせんじゃねえ。オラ、俺に残された時間はそう長くないんだ、とっとと闘（や）ろうぜ」

フリードリヒは即答でヴォルフリートの提案を蹴り、臨戦態勢を取ったが、その額には脂汗が浮かんでいた。
「ふははは、そうか、受け入れぬか。ならば今度こそ二度と立ち上がれぬほど叩きのめしてやろう！　さあ、来るがいい！」
ヴォルフリートはフリードリヒの答えにひとしきり笑うと、玉座から立ちあがって、フリードリヒを挑発した。
「ヴォルフリートよ、先に言っておこう。俺の身体はもうてめぇと全力で戦える余力は残ってねぇ。だから、俺の残り僅かな生命力と魔力を込めたこの一撃をてめぇがしのぎ切れば、てめぇの勝ちだ。行くぜっ……受けてみろ、俺の最終奥義、『ライフ・エクスプロージョン』！！」
しかしフリードリヒはヴォルフリートの安い挑発に乗ることなく、静かに告げて最期の一撃『ライフ・エクスプロージョン』を放った。残り少ない生命力と魔力を自らの身体に纏い、巨大なひとつの弾丸と化してフリードリヒはヴォルフリートに突撃した。
「いいだろう、フリードリヒよ。貴様の覚悟、しかと見届けた。貴様の最終奥義、私は正面から受け止めてやろう！」
少々幅があるとはいえ、なにぶん攻撃の軌跡は直線的なので、避けることはたやすかったろうが、ボロボロの肉体で、死を賭して再戦を挑んできたライバルの姿に、ヴォルフリートも心が燃え上がったのか、両腕を前に突き出し、避けずに受け止めることを選んだ。
ほどなく着弾し、激しい爆発と閃光が玉座の間を覆い尽くした。その煙と閃光が晴れたとき、そこには――
「ぐっ……！」
「む、無念……」
フリードリヒの決死の攻撃は受け止めたヴォルフリートも無傷では済まなかったが、しかしヴォルフリートを貫くには至らず、フリードリヒはその場で倒れた。
「ぐ、うっ……！　フリードリヒよ、貴様は最期までこの私を苦しめた良き好敵手（ライバル）であったぞ……おい、誰かイグニィドを呼べ」

ヴォルフリートはフリードリヒの攻撃を受け止めた際に直接着弾した両腕を吹き飛ばされ、傍目には瀕死とも見て取れたが、いくらフリードリヒの攻撃が彼の生命を懸けていたとはいえ、たった一発の攻撃で自らをここまで追い詰めた好敵手に敬意を表すると、先ほどの爆発を生きのびた配下の魔物に、親衛隊のイグニィドを呼んでくるよう命じた。

「お呼びでござ……ヴォルフリート様っ！？　そ、そのお体は……っ！？」

急な呼び出しに、何事かと謁見の間に駆け付けたイグニィドは、あまりに痛々しいヴォルフリートの姿に驚愕した。

「先ほど、フリードリヒが最期の戦いを仕掛けてきた結果がこれだ。私はヤツの生命を懸けた一撃を殺し切れなかった。私はこの傷を癒すため、一度魔界に戻り、しばらくの間眠りにつく。その間の指揮権はイグニィド、お前に預ける。各地の戦力を増強し攻めに出るも、あるいは私が戻るまで守りに入るも、お前の判断で決めるがいい。では、任せたぞ……」

ヴォルフリートはイグニィドに事情を説明すると、魔王軍の指揮権をイグニィドに預けると言い残し、姿を消した。

「ははっ、承知いたしました。このイグニィド、ヴォルフリート様の留守、確かに預かりました……！」

すでにヴォルフリートの姿はないのにも関わらず、イグニィドはしばらくの間、主のいなくなった玉座に対して、直立不動で敬礼をし続けたのだった。また、倒れていたはずのフリードリヒもいつの間にか姿を消していた――

08．杖を求めて（後編）

少し時は戻り、ヴォルフリートとフリードリヒが対峙する少し前。エドガーとベアトリーセの2人は、元はアルペンハイム城で、現在は魔王軍の本拠地として使われている魔王城に潜入していた。

「何か、城内が騒がしいですわね……もしかして、わたくしたちの存在に気づかれてしまったのでしょうか？」

城内の構造はほとんど変わっていないように見えたので、まずはエドガーの部屋がある3階を目指そうとした2人だったが、城内が妙に騒々しく、あちこちを魔物が走り回っていたために、1階の階段の陰から動けずにいた。

「いえ、どうやら別の原因があるようです。殿下、すぐそこで話し声が聞こえますので、耳を澄ませてみましょう」

エドガーが小声で話しながら、そっと指差したほうを見ると、確かに階段のそばで魔物が何やら話していた。

「なぜフリードリヒ卿の侵入を阻止できなかった！？　卿は先日我らがヴォルフリート様の手によって瀕死の重傷を負ったはず！　我が隊は瀕死の相手すら取り押さえられないのか！」

「隊長！　卿はもはや、命を捨てる覚悟で鬼神と化しており、瀕死とはいえ我々の手に負える相手ではありません！　すでに隊の半数以上が卿に殺されました！」

「と、とにかくだ！　我が隊のメンツをかけてでも卿を取り押さえるんだ！」

魔物たちはその後も怒鳴り合いを続けながら、階段を駆け上がっていった。

「なるほど……ヴォルフリートに敵対する魔族がいて、それが今回ここへ侵入した、と。魔物たちの慌て方と今の話から総合すると、そういうことのようですね。この騒ぎに乗じて、目的を果たしてしまいましょう」

情報を掴んだエドガーは頷くと、ベアトリーセに目配せをして、素早く階段を駆け上がっていく。ヴォルフリートがいる謁見の間がある2階の廊下に魔物が集中していたようで、2階と3階の間の踊り場を過ぎると、魔物の気配もほとんどなくなり、2人はホッと一息つくことができた。

無事に3階のエドガーの部屋で彼の予備の杖を回収し、2人は5階にあるベアトリーセの部屋にやってきた。周囲に魔物の気配がないのを確認しながらベアトリーセがそっと扉を開けた瞬間、突然大きな爆発音がして城全体が揺れた。

「うわあっ！」

「きゃあっ！」

突然の揺れに2人は全く対処できず、それぞれ悲鳴を上げて吹っ飛び、床に叩きつけられた。

「くっ……殿下、おケガはございませんか？」

エドガーがまず立ち上がり、ベアトリーセが立ち上がるのを手伝うべく、右手を差し出した。

「ええ。ありがとう。でも、今のはなんだったのかしら？　ひときわ大きな音でしたけれど……」

ベアトリーセはその手を取って立ち上がると、首をかしげた。

「非常に巨大な魔力同士の衝突、といったところでしょうか……？」

エドガーはおおよその推測を述べてみたが、それがフリードリヒの『ライフ・エクスプロージョン』が放たれ、ヴォルフリートがそれを受け止めたことによるものだとは、2人には知る由もなかった。

「わからないものを考えても仕方ないわね。それよりもわたくしの杖は……ありましたわ！　さあ、先生、帰りましょう」

ベアトリーセは軽く首を振って気持ちを切り替え、寝室の片隅に落ちていた自分の杖を拾い上げると、エドガーを促した。

「そ、そうですね。では、殿下。少々、失礼いたします。“魔力（マジック）――」

エドガーも頷き、ベアトリーセから魔力をもらうべく、魔法を唱

えかけた、その時。
「ま、待て……」
突如、2人の背後にある部屋の入口付近から声がして、何者かが部屋の中に倒れこんできた。
「ま、魔族……！　マズイ、バレたか――っ！？」
エドガーはその者の見た目からすぐに魔族と見破り、杖を構えたが、
「待って、先生！　この方、ひどいケガをされてますわ……！」
ベアトリーセは今にも残り魔力がわずかであるにも関わらず、それを使い切る覚悟で攻撃魔法を放たんとしていたエドガーを止めると、開いていた部屋の扉を閉め、うつぶせに倒れていた魔族の身体を転がして仰向けにした。
「警戒、しなくても、大丈夫だ……俺はもう、戦えない。俺の……名は、フリードリヒ。お前は……人間、ということは、この、城の者か？」
魔族――フリードリヒは荒い息でゆっくり上半身を起こすと、自身に戦闘能力がないと前置きをしてから、2人に訊ねた。
「ええ、わたくしの名はベアトリーセ＝リア＝アルペンハイム。魔王ヴォルフリートに滅ぼされし、この国の王女だった者ですわ。あなたは、なぜそんなに傷だらけに？　魔王ヴォルフリートのしもべではないのですか？」
ベアトリーセは毅然とした態度で名を名乗ると、フリードリヒに訊ねた。
「へっ……冗談、じゃねえ。俺は、ヴォルフリートの、しもべなんか……じゃねえさ。むしろ、ヤツを殺したいと……誰よりも願う、ライバル、だった。俺は……魔界の統一をかけて、ヤツに決闘を挑み、一度は敗れた。だが、ヤツは……俺にトドメを刺さずに、立ち去り……生き長らえた、俺は……ヤツにそれを、後悔させるため、こうして、ここへ来たのさ。だが、俺の全てをかけた攻撃も、ヤツを倒すことは……できなかった。全ての力を、使い果たした俺は、

この城の中に、魔族とは違う存在がいるのに気づき、それを、確かめるため、ここへ、やってきたのだ。万全な状態なら、魔界で、ヴォルフリートに次ぐ、戦闘力を誇り、“力のヴォルフリート、知のフリードリヒ”と称された俺だが、今の状態では、お前ら人間よりも、戦闘力は、劣る存在に、すぎない。ここで、俺はトドメを、刺されても構わぬ。だが、俺は……魔王ヴォルフリートの軍勢を、ある程度把握している上に、ヴォルフリートに刃を向けた以上、俺もまた、魔王軍のお尋ね者に、なっているはずだ。どうだ、この際人間とか、魔族とかを超越して、ヴォルフリートを、倒すために、手を組まないか？」

フリードリヒは事情を説明すると、2人に同盟を持ちかけた。

「承知いたしましたわ」

ベアトリーセは頷き、フリードリヒとの同盟を受け入れた。

「で、殿下っ！？　相手は魔族ですよ！？　そんな簡単に――」

「先生が心配されるのも無理はありません。ですが、このフリードリヒの身体はもはや回復魔法さえもほとんど効果を見込めないほど、ボロボロです。そのような方がわたくしたちと同盟を組んでまで、お父様の仇でもある魔王ヴォルフリートを倒したいと願っておられるのです。それに、わたくしたちは魔王軍についてほとんど何も情報がない以上、フリードリヒの知識はきっと役に立つでしょう。また、もしも裏切ったのならば、その場で倒せば済むだけのこと。違いますか？」

エドガーが慌てて止めようとしたが、その言葉を遮ってベアトリーセは同盟を受け入れた理由をエドガーに告げて、反論を封じた。

「僕自身の中で納得するには少しお時間をいただきたいところですが、理屈としてはおっしゃるとおりだと思います。……では、今度こそここから脱出してしまいましょう。殿下、改めて失礼します。“魔力吸引（マジック・サプション）”！」

エドガーは半ば無理やり自分を納得させるようにつぶやくと、先ほどはフリードリヒの乱入で中断させられていた、魔力を吸収する

魔法をベアトリーセに向けて使った。
「んっ……」
自らの体内を循環する魔力を吸い取られたことで、ベアトリーセは一瞬だけ身体から力が抜ける感覚に襲われたが、倒れることなく踏ん張った。
「殿下、お体は大丈夫ですか？」
ベアトリーセの魔力を自らの魔力に変換し終えたエドガーがベアトリーセに訊ねると、
「ええ、大丈夫よ」
ベアトリーセは笑みを浮かべながら頷いた。
「やはり、殿下の魔力量はケタが違うようですね。僕の魔力をほぼ全快にするほどの量をいただいたにも関わらず、ほとんど減っておられないなんて……。いや、今はそんなことを考えてるよりも早くここから出なくてはなりませんね。殿下、行きますよっ！　“転送（テレポート）”！」
どうやらベアトリーセの魔力の総量はエドガーが思っていたよりもずっと多かったようで、少しの間ブツブツと何かつぶやいていたが、突然ハッと我に返ると、ベアトリーセの腕をとり、それから少し嫌そうにしながらもフリードリヒの身体に触れてから転送魔法を使ってヴァイセンの街に帰還したのだった。
一方その頃、謁見の間では――
「ヴォルフリート様に刃を向けた裏切り者には、死あるのみ……待っていろ、フリードリヒ……！」
魔王代行となったイグニィドが、瀕死の身で主たるヴォルフリートに重傷を負わせたフリードリヒの息の根を止めるため、討伐隊の編成を進めていた――

09．ヴァイセン防衛戦

「ぐっ！　この……っ！」

ベアトリーセとエドガーが魔王城に向かった後しばらくして、ヴァイセンの街ではブルクハルトが次々に襲いくる魔物たちから街を守るために戦い、これまでに数十体以上の魔物を仕留めていた。この街を含めて世界の大半の街では、外周を取り囲む外壁は上まで完全に覆い、そう簡単には壊されない強度を持っていたのだが、すでに街の外壁の一部は破壊され、このままでは程なくして魔物たちの侵入を許してしまいそうな状況。そうなればまともに身を守る武器も防具も持たない住民たちが皆殺しにされてしまう、と街の入口で孤軍奮闘するブルクハルトも全身に傷を負い、戦況は厳しくなる一方。

（マズイ……）

ついに力尽き、その場に倒れかけたブルクハルトを、何者かが抱きとめた。

「ブル、よく持ちこたえたわね。ありがとう、あとはわたくしが！」

倒れたブルクハルトを抱きとめたのは、魔王城から帰還したベアトリーセだった。ベアトリーセはブルクハルトをエドガーに託すと、ブルクハルトと入れ替わるように最前線に立った。

「殿下、戦いに参加できず申し訳ありません……！」

エドガーとしては、本来自分が最前線に立つべきだと考えていたのだが、魔王城からヴァイセンの街までの転送魔法（テレポート）の使用による消耗で魔力が枯渇していて、これほどの数の魔物を前にしては先ほど使ったような魔力吸引の魔法など使ってる余裕はなく、到底戦える状態ではなかった。

「先生のおかげでわたくしの杖を取ってこれたんですもの、気にする必要はありませんわ。さあ、行きますわよ！　“衝撃波（ショック・ウェイブ）”！」

ベアトリーセは軽く振り返ってエドガーに微笑むと、先ほど城で

回収してきた杖を高く掲げ、魔物の群れに向けて衝撃波の魔法を放った。
「！！」
単なる衝撃波だが、魔力の強いベアトリーセが放てばその威力はとてつもないものになるらしく、音速を超える速度で襲いかかった衝撃波を魔物たちは避けることなどできるはずもなく、一瞬にしてその身体が粉々になり、灰と化して消滅した。
「これで全部、倒しましたわね。ブル、大丈夫？　“小回復魔法（キュア）”」
魔物の全滅を確認したベアトリーセは、エドガーの肩を借りてようやく立っている状態のブルクハルトに回復魔法をかけた。
「ふう……ありがとうございます、殿下。その様子だと、無事目的を果たされたようでございますね。――ん？　ところで、そちらはどなたですか？」
ブルクハルトはしっかり自分の足で立って、ベアトリーセに礼を言うと、彼女がその手に携えている杖を見て、目的を達成したことを確かめたところで、ふと彼女の後ろに傷だらけの見慣れぬ存在がいるのに気づき、ベアトリーセとエドガーに訊ねた。
「え、ああ、こちらは――」
「俺か。俺の名はフリードリヒ。かつてヴォルフリートと魔界の覇権をかけて争った、魔族だ」
一瞬ドキッとして、戸惑いながらも紹介しようとしたベアトリーセの言葉を遮るように、フリードリヒ自ら名乗りを上げた。
「なっ、魔族！？　殿下、危険ですから離れてっ！　行くぞっ！」
予想外の返答にブルクハルトは驚いたが、すぐに我に返って剣に手をかけると、ベアトリーセに離れるよう言って、フリードリヒに飛びかかろうとした。
「止めなさい、ブルクハルト！　これは命令よ！」
だがベアトリーセは一歩も動かず、毅然とした態度でブルクハルトに命じた。
「な、なぜです殿下！？　私たちの国を滅ぼした憎き魔族を攻撃し

て何が悪いのですか！？」
　しかし納得がいかないブルクハルトは剣に手をかけたまま、珍しくベアトリーセに反抗的な態度をとって訊ねた。
「落ちつきなさい、ブルクハルト。確かに、わがアルペンハイム王国は魔王ヴォルフリートによって壊滅させられたわ。だから、あなたが魔族を憎む気持ちも理解できるし、もちろんわたくし自身もその気持ちを忘れたわけではないわ。でも、このフリードリヒは、同じ魔族でもヴォルフリートに敵対し、ヴォルフリートに単身戦いを挑んで、もう決して完治することのない重傷を負ったの。そして、ヴォルフリートに刃を向けたことで彼もまた魔王軍のお尋ね者になっているであろうことから、わたくしたちとともにヴォルフリート率いる魔王軍と戦うための同盟を結んだのよ」
　犬歯をむき出しにし、敵意をあらわにフリードリヒを睨み続けるブルクハルトを諭すように、ベアトリーセは事情を説明した。
「いや、しかし、殿下……」
　それでもまだ納得がいかないのか、ブルクハルトは右手を剣から離そうとはしなかった。
「お黙りなさい。いい？　わたくしたちは、魔王ヴォルフリートを倒し、この大地から魔族を追い出すことを最終目標としているわ。でも、一方的に滅ぼされたわたくしたちには、戦うべき敵である魔王軍の情報が一切ないのはわかるわね？　でも、フリードリヒと同盟を組んでともに戦えば、その部分もかなり補えるのよ」
「――そうだ。俺は、純粋な魔力という面においてはヴォルフリートを超えることはできなかったが、戦いは力が全てではない。俺は、この知性を武器に魔界で勢力を拡大していった。その過程で、ヤツの軍勢もある程度は把握しているからな。何も知らずにヤツに挑もうとしているお前たちの助けくらいはできるだろう」
　ベアトリーセの言葉に続けて、フリードリヒが自らの存在意義を語った。傷は完治せずとも、普通に話せるくらいまでは回復しているようだった。

「殿下がそこまでおっしゃるのでしたら……」
そこまで言われて、しぶしぶながらもブルクハルトは剣から手を離し、臨戦態勢を解いた。と、そのとき。轟音とともに、街の入口の門が爆発、破壊された。
「なんだっ！？」
爆発による黒煙が立ち込める中、ブルクハルトとベアトリーセは素早く剣と杖をそれぞれ構えて臨戦態勢をとり、エドガーは街の住民の避難、そしてフリードリヒは――
「やはりな。そろそろ来るころと思っていた。王女と騎士（おまえたち）、これは俺の戦い、手出しは無用だ。すぐに他の人間たちと共にここから離れてどこかへ避難していろ」
冷静に黒煙の中に向けて呼びかけ、２人にもこの場を離れるよう告げた。
「で、でもその身体では――」
「いいから行け！　今のお前たちに敵う相手ではない！」
２人、特にフリードリヒの身体の状態を知っているベアトリーセは渋ったが、フリードリヒの強い口調にやむなく頷くと、エドガーと協力して街の住民を避難させ、自分たちも街の奥にあるシェルターへと避難した。やがて黒煙が晴れ、徐々に影が浮かび上がってきた。
「わかってたんなら話は早い。早速で悪いが、ヴォルフリート様に刃を向けただけでなく、その御身に重傷を負わせた挙げ句に人間と手を組み、かばうようなマネをした貴様を、生かしてはおけねえ。覚悟はいいか、フリードリヒ！」
不敵な笑みとともに出てきたのは、ヴォルフリート親衛隊の隊長格にして、現在は魔王代行となっているイグニィドと、彼が選抜したフリードリヒ討伐隊の魔物たちだった。イグニィドはフリードリヒにビシッと指を突きつけて宣戦布告をし、それと同時に後ろに控えていた魔物たちが一斉にフリードリヒに襲いかかった。しかし――
「親衛隊の小僧よ。いくら俺が瀕死だとしても、並の魔物（ザコ）ごときで

俺を葬り去れると思うな！」
　フリードリヒは一声の咆哮をあげると、瀕死の身ながら、たったの一撃で襲いかかってきた魔物たちをまとめて返り討ちにしてしまった。
「――なるほど。さすがにヴォルフリート様と魔界の覇権をかけて長い間争われただけはある。瀕死だからと、甘く見過ぎていたようだな。ならば、あとはおれ自ら引導を渡すしかないようだな。行くぞっ、あっさり死んでくれるなよ！？」
　イグニィドは自らの計算ミスを潔く認めた上で、そのミスを自ら埋めるために、炎の剣を生成し、フリードリヒに襲いかかった。これに対し、フリードリヒは何か仕掛けようにも魔力がほとんど枯渇していて反撃もロクにできないので、両腕を胸の前でクロスさせ、防御に専念することにした。
「オラオラ、どうした！？　反撃してこねえなら、このまま――！？」
　炎の剣で猛攻を仕掛けるイグニィドは、フリードリヒがじっと耐えて防御に専念しているのが面白くないのか、彼を挑発しようとしてみたが、言いかけたところで、不意に悪寒を感じて飛び退った。直後、イグニィドのいた場所をフリードリヒの拳が通り過ぎた。
「ちっ、外したか。まだ体力が十分に戻ってない以上、攻撃の機会は限られてるんだが、な……」
　再び額に脂汗を浮かべ、息も絶え絶えなフリードリヒは、空振りした自らの拳を見て、悔しげにうめいた。
「この、死にぞこないめ……いい加減、くたばれっ！」
　イグニィドは一言、つぶやくと再びフリードリヒに猛攻を仕掛けていった。引き続きフリードリヒはじっと耐える姿勢で反撃のチャンスを待ち続けたが、もともと瀕死であったフリードリヒに、そこらにいる有象無象の魔物の攻撃ならともかく、魔王ヴォルフリートの片腕である親衛隊、それもリーダー格のイグニィドの攻撃を長時間耐え続ける体力は残っていなかった。

「ぐ、ぅっ……」
ついに体力が尽き、交差させていた腕が解けた一瞬のスキを見逃さず、イグニィドの剣がフリードリヒの胸を刺し貫いた。
「フン、やっと倒れたか……」
イグニィドは倒れて動かなくなったフリードリヒの身体から剣を抜いて消すと、一言だけつぶやいて、避難している街の人間やベアトリーセたちには興味がないとばかりにそのまま立ち去ったのだった。

１０．本格的な旅の始まり

「フリードリヒさんっ！」
外が静かになったので、様子をうかがうためにそっと外に出てきたブルクハルトとベアトリーセは、街の入口に倒れているフリードリヒを見つけて、慌てて駆け寄った。
「王女と、騎士、か……。俺は、もう、ダメ、だ……。俺の、代わりに、ヴォルフリート、を、うっ、倒して、くれ……。最期に、俺が、知る限りの、魔王軍の情報、を渡す……騎士、俺の、手を、握れ……」
２人が駆け寄ってきたことに気づいたフリードリヒは、最後の力を振り絞って話しはじめ、ブルクハルトに自分の手を握るよう頼んだ。
「これで、いいのか？」
訝しげな顔をしながらも、言われたとおりにブルクハルトはフリードリヒの手を握った。
「ああ、それで、いい……では、行くぞ……むんっ！」
フリードリヒはわずかに頷いて、手に力を込めた。すると、フリードリヒの頭から、ブルクハルトが握っている左手めがけて、何かのエネルギーが流れ込んでいった。
「こ、これは……頭の中に何かが流れ込んで……！？」
そのエネルギーはそのままブルクハルトの脳まで伝わり、彼は戸惑いを隠せない様子でつぶやいた。やがてエネルギーの流れが止まると、最後の力を使い果たしたらしいフリードリヒの身体が、ボロボロと灰のように崩れ落ちて行った。
「……」
たとえ憎むべき魔族といえども、味方としてそこに存在していたという痕跡ひとつ残らない死に様に、２人とも自然に涙がこぼれていた。と、そのとき。

（騎士よ……俺の知る限り、全ての魔王軍に関する知識をお前に託した。お前たち自身のためにも、俺のためにも、そして魔族の俺がこんなことを言うのも変だが、ヴォルフリートのせいで苦しんでいる人々のためにも、必ずやヤツを倒してくれ……！）

ブルクハルトの頭の中に、フリードリヒの声が聞こえてきた。その声に、ブルクハルトはまた涙を流しながら大きく頷いた。

「ブル、どうしたの？」

声が聞こえてないらしいベアトリーセは、一人で涙を流しながら頷くブルクハルトの様子に、首をかしげて訊ねた。

「いま、声が聞こえてきて、先ほどフリードリヒさんが私に託したのは、彼が記憶していた魔王軍に関する知識のようです。……行きましょう、殿下。ヴォルフリートを倒すために」

ブルクハルトは簡単に説明をすると、ベアトリーセに旅立ちを促した。

「そうね、いつまでもここにいるわけにもいかないものね。それじゃ、先生にそう伝えてこなくちゃ」

ベアトリーセは頷くと、エドガーや街の人々が避難している建物のほうへ小走りで駆けていこうとした。しかし、

「途中からですが、話は聞かせてもらいましたよ。旅立たれるのですね、殿下。僕はこの街を魔王軍から守るために残らせてもらいますが、どうかお気をつけて。――これは、せめてもの贈り物です。どうぞ」

すでにエドガーは建物から出てきて、近くまで来ていた。驚いた表情の２人に、自分は２人の旅には同行しない、と告げて、シェルターから出てくる際に一緒に持ってきたと思われる、大きな箱を開けた。

「まあ……」

そこには、女性用の服や、腕輪や指環といった装具類と、当面の旅の資金であろう１２０００Ｇ（グノン）相当の金貨が入っていて、ベアトリーセは思わず声をあげていた。

「こちらは、もとはただの服でしたが、胸部の内側に薄い鉄板を入れるように少し改造し、防護性能を上昇させただけでなく、私の持ちうる限りの防御魔法を仕込んでおきました。おそらく、並の魔物程度では傷ひとつつけられはしないでしょう。同様に、腕輪や指環も魔力で補強してあります。腕輪や指環はブルクハルト君の分も用意させてもらったから、使うといい」

エドガーは、箱に入っていた“贈り物”をひとつひとつ説明し、2人に手渡していった。

「ありがとう、先生。では、着替えてまいりますわ」

ベアトリーセは、エドガーに礼を言うと、渡された服や装具を持って、先ほどまで避難していたシェルターに駆けて行った。

「ありがとうございます、エドガーさん。これまでの旅では、私が持っていたわずかな金銭でやりくりしてきていたので、金銭面での援助はとても心強いです」

ブルクハルトもエドガーに礼を言って、手渡された腕輪を左腕に、指環を右手の中指に嵌(は)めた。

「ドレス以外を着用したことがないからわからないのですが、着方はこれでいいのかしら……？」

そこへ、着替え終わったベアトリーセが戻ってきた。

「だいじょうぶ、バッチリでございます、殿下」

エドガーが笑顔で頷いた。

「では、まいりしょうか、殿下」

準備が整ったとみたブルクハルトがベアトリーセにそう声をかけると、

「あ、ちょっと待って。この先、わたくしを“殿下”と呼ぶのはやめましょう。わがアルペンハイム王国はすでに滅亡した以上、わたくしはもはや王女ではないわ。だから、わたくしはいまこの時をもってベアトリーセ＝リア＝アルペンハイムの名を捨て、ベアトリクス、ベアトリクス＝リアハイムと名乗ることにします」

ベアトリーセがブルクハルトやエドガーに対し、今後自分を“殿

下”などと呼ぶことをやめるよう言い、また今後はベアトリーセ改め、‘ベアトリクス’――ベアトリクス＝リアハイムと名乗ることもあわせて宣言した。
「殿下の呼び名を廃する件とそれにともなう新たな名前、承知いたしましたが、それではなんとお呼びすればいいのですか？」
ブルクハルトが戸惑いを隠せないような表情で訊ねると、
「そうね、確か以前城の書庫で読んだ本の中に、今のわたくしたちのような冒険をする物語があり、そこでは仲間同士は気軽に名前で呼び合っていたわね。では、今後わたくしのことは“ベア”と呼んでくれて構わないのと、敬語も必要ないわ。あ、そうそう。先日、あなたをわたくしの騎士に任命すると言いましたが、それとこの呼び方の話とは別々に考えてくれていいわよ」
‘ベアトリクス’は少し考え、ふと城の書庫で読んだことのある本を思い出し、それを参考にして“ベア”と呼ぶよう言った。
「承知……いえ、わかりま……わかった、ベア。――こんな具合ですか？」
何度も言いなおした末に、これまでであれば絶対にありえない口の利き方をしたブルクハルトは、念のため‘ベアトリクス’に訊ねてみた。
「ええ、それでいいわ。わたくしも、出来る限りこの話し方を庶民のように近づけられるよう努力してみるわね」
‘ベアトリクス’は頷き、自らもこれまで王女として厳しく教え込まれた話し方などを変える努力をすることを約束した。
「いや、ベアのような話し方はごくまれにだけど庶民にもいないことはないから、そのままでも大丈夫。ところで、次はどこへ？」
まだこの話し方に慣れないブルクハルトは‘ベアトリクス’の表情を伺いながらも、あえて話し方を変える必要はないと告げ、次の目的地を訊ねた。
「そうなの？　でも、努力はしてみるわ。ブル、地図を出してくれる？」

‘ベアトリクス’は意外そうな表情をしたが、すぐに真顔に戻って努力を続けることを決め、続いてブルクハルトに地図を出すよう頼んだ。
「はい、ここに」
ブルクハルトは地図を出すよう言われるのを予測していて、すでに手元に地図を持っており、すぐにバッと地図を広げた。
「ええと、今いるヴァイセンがここだから……ホールテンまで行けば、すぐ隣国フィドルか」
「では、フィドル共和国との国境の街、ホールテンへ行きましょう」
ブルクハルトが地図上で現在地のヴァイセンの位置を確認すると、西に半日ほど歩いたあたりに隣国であるフィドル共和国との国境、そのすぐ手前にホールテンという街があることがわかり、‘ベアトリクス’がそれを受けて素早くそこに行くことを決断した。
「はい。それじゃ、エドガーさん。いろいろとありがとうございました。行ってきます！」
ブルクハルトは‘ベアトリクス’の決断に頷くと、立ち上がって荷物を背負い、見送るエドガーやヴァイセンの街の人々に手を振り、2人は街を後にした。
「2人とも、必ず生きて戻ってくるんだよ！」
すると、エドガーの妻が大声で2人にゲキを飛ばし、ブルクハルトたちはそれに大きく手を振り返すことで応えるのだった。

１０．本格的な旅の始まり（後書き）

今回でアルペンハイム王国領での話はひと段落し、舞台は陸続きの隣国、フィドル共和国へと移っていきます。
一応、現段階でフィドル共和国領編は出来上がっているので更新を続けられなくはないのですが、先日までの計画停電の影響からその先――エリュアール王国領編の執筆が滞っているのと、ゴールデンウィークが明けるまでは日曜日も仕事になってしまうこともあり、当面の間、この回をもって休載、ということにさせていただきます。
予定では、ゴールデンウィークが明けた後、５月１５日の日曜日の再開を考えておりますので、よろしくお願いします。

11．国境

フィドル共和国との国境を目指し、西に歩くことおよそ半日。2人は国境の街、ホールテンに到着していた。

「もうそろそろ日も暮れることですし、ひとまず、宿を探しましょう。わたくし、少し疲れてしまいました」

ベアトリクスは苦笑いを浮かべながら、ブルクハルトに宿を探そうと言うと、

「はっ、では探してまいりますので、少々……」

ブルクハルトは以前のようなしゃべり方に戻っているのも気づかずに言って行こうとしたが、ベアトリクスがその足を引っ掛けて転ばせた。

「な、何を――」

「お黙りなさい。わたくし、ヴァイセンを出発するときに言いましたわよね？　わたくしを王女として扱うのはやめるように、と。だから、宿を探すのもあなた一人にやらせるつもりはないわよ。一緒に、探しに行きましょう。わかったかしら？」

いきなり転ばされて、もろに顔面を打ったブルクハルトは何が起こったのか理解できず、その真意を確かめるべく顔を上げて振り仰いだところに、不機嫌そうなベアトリクスの声が降ってきた。その言葉にハッとしたブルクハルトが立ち上がって埃を払うと、打って変って優しい微笑みを浮かべたベアトリクスがブルクハルトの手を取った。

「は、わかり――わかった。行こう」

まだクセが抜けきらないようで、敬語になりかけたが、今度は気づいてすぐに修正し、2人は宿を探してホールテンの街を歩き始めた。

「どうぞ、ごゆっくり」

幸いにもすぐに宿は見つかり、また別々の部屋にするために2部屋を希望したところ、やはり魔王軍の侵攻の影響で客が少なくなっていたらしく、楽に2部屋確保することができた。
「それで、これからのことなんだけど、王女として振る舞うのをやめるということは、各国の直接の援助は受けられないということになると思うけど、いいの？」
夕飯を食べた後、2人はブルクハルトの部屋でこれからのことを考えるにあたって、ブルクハルトが訊ねた。
「ええ、構いませんわ。各国の情勢も全くわからない今の状態では、仮に王女として各国に支援を求めたとしても、それに応えていただける保証はどこにもありません。あるかどうかもわからない支援をあてにするくらいなら、最初からそのようなものは求めずに進むべきだと、わたくしは思います」
ベアトリクスは即答し、その理由を話した。
「なるほど、確かに……。では、改めてアルペンハイムを出る明日からはただの旅人、ということで行くとして、後は次の目的地か。フィドルから先に進むには、南西部の港町セブからエリュアール王国北部の街、ルトースへの定期船しかなかったような……。アルペンハイムからであれば、南東の港町フォルーから各国への定期船が運航していたけど、国家直営だったから、今は全部止まってる以上、このルートしかないかな」
ブルクハルトは納得したように頷くと、一言確認をしてから、次の話題として目的地を挙げた。かつてのアルペンハイム王国軍では、文武両道が奨励されており、特に王家の人間と直接関わる機会の多い近衛兵は、最低でも各国の地理情報くらいは覚えていて当たり前、という方針だったため、その例にもれずブルクハルトも地図さえあればどこにどういった街があるか、程度のことは説明ができるくらいの知識は持ち合わせていた。城の倉庫から持ちだしていた世界地図でフィドル共和国の部分を見ながらこの先のルートを考えたところ、南西にある小さな港町からの海路しかないことがわかった。

フィドル共和国は、農業に力を入れ、他国のように軍備や工業といった部分にはあまり力を入れずに発展を拒んできた歴史があるせいもあり、年々過疎化が進む国である。
「そのようですわね。では、セブに向かうことにして、そろそろ休みましょう」
ベアトリクスも王女としてきちんとした教育を受けてきていることもあって、ブルクハルトの話に大きく頷き、眠るために自分の部屋へ戻っていった。

「誰もいない……？」
翌朝、ホールテンの街を後にし、国境へとやってきた2人だったが、国境に設けられていた両国の兵士詰所には誰もいなかった。アルペンハイム側は仕方ないとしても、フィドル側にさえ誰もいないのはなぜなのか、とブルクハルトが考えていると、
「ケ――――ッ！」
突如、上空から奇声をあげて槍を携えた魔物が突撃してきた。
「ぐっ！　……ていや――っ！　おい、ここの詰所にいたフィドル兵はどうした」
一瞬反応が遅れたブルクハルトは回避が間に合わないと悟ると、背負っていた荷物をその場で下ろし、身軽になると同時に左手の盾で受け止め、そのまま力任せに押し返したが、弾かれた魔物は空中で態勢を立て直して、余裕で着地してみせた。その魔物に、ブルクハルトはここの兵士の行方を訊ねた。
「ケケ、ここだ、ここ。あまり美味しくはなかったがな」
すると魔物はニヤリと笑い、自らの腹を指し示した。
「――――ッ！　おのれ、成敗してくれるっ！」
殺されている、という最悪の可能性を考慮していたブルクハルトは、その通りの事実の中でもことさらに惨い殺され方にショックを受けながらも、すぐに我に返って、剣を抜いて飛びかかった。
「ケケケ、返り討ちにしてやんよ！」

魔物も少しだけ宙に浮かんで槍を構えると、ブルクハルトの突撃に対し、カウンターを仕掛けようとした。だが、ブルクハルトは後方でベアトリクスが何かの魔法を使う気配を感じたために、突撃の勢いを途中で緩め、剣を納めて右に跳んだ。
「剣を納めるとは、臆したか！？　死ねぃっ！」
魔物はブルクハルトの後方にいるベアトリクスの行動までは目に入っておらず、ブルクハルトが攻撃態勢を解いたのを見て好機と思い、自らのカウンター態勢から突撃に切り替えてブルクハルトに突っ込もうとした。
「させませんわ！　墜ちて潰れてしまいなさい！　“重力砲（グラヴィティ・キャノン）”！」
しかし、そこにベアトリクスが対象への重力を１０倍に増幅させる魔法を放ち、宙に浮かんでいた魔物の身体は地面に落ちた。それでもなお魔法の効果は続いており、最後にめきょっ、という奇妙な音とともに魔物の骨格が破壊され、絶命した。
「ありがとう、ブル。よく、気づいてくれました」
「どういたしまして。ひとまず倒したけど、国境警備が襲われていたってことは、政府も危ない状態かもしれないな。ベア、この先セブまで一直線に行くか、途中で首都のスイゲフに寄って様子を見てからセブへ向かうか、どっちにする？」
ブルクハルトは海を越えるために目指すセブまで、最短距離で行くか、ちょっと大回りになるけど首都のスイゲフに立ち寄るかの判断を求めた。
「そうね、ではスイゲフを経由してからセブに向かいましょう。最短距離でセブへ行っても、その前に政府が壊滅してしまえば、エリュアールへの定期船も滞ってしまいかねないもの」
すると、ベアトリクスは首都を経由して港町セブへ向かうことを決めた。
「わかった、じゃあここから北にある首都スイゲフに向かおう。確か、半日ほど歩けばたどり着ける距離だったと思う」
ブルクハルトは頷くと、荷物を背負ってベアトリクスとともに再

び歩き出した。――その背後、詰所だった建物の陰で偵察用と思しき小型の魔物が1体、2人の会話を聞いていたことに2人は全く気づかず、魔物は2人が見えなくなった後、先ほどベアトリクスに倒された魔族の死と、2人の次の行き先を魔王城にいるイグニィドに連絡していた。

すっかり日も沈んだ夜になって、ようやく2人はスイゲフの街の明かりが見えるところまでやってきた。

「よかった、とりあえずスイゲフの街が無事ということは、フィドル政府もまだ壊滅させられてはいないんだな。これなら、セブの定期船も動いてるだろうな。でも、もう日も暮れてしまったし、スイゲフで宿を取ろう」

かつてのアルペムの街のような明るさはないものの、人々が生活していることは感じられる街の明かりを見て、ブルクハルトはホッとしていた。

「そうね、あちらこちらから魔物が飛び出してくるんですもの、疲れてしまいましたわ」

ヴァイセンでエドガーからもらった服のおかげで傷こそないが、度重なる戦闘の影響で相当な疲れがたまっていたのか、2人はスイゲフの宿に入るなり、すぐに寝てしまったのだった。

１１．国境（後書き）

お待たせしました。ＧＷまでの仕事も終わったので、連載を再開します。
また、毎週日曜の更新でやっていくつもりですので、よろしくお願いします。
現在の執筆状況などはブログにて時々は記していきますので、そちらをご覧ください。

12．魔王軍の刺客

少し時間は戻り、ブルクハルトたちがフィドル共和国に入り、スイゲフを目指して歩き始めた頃、魔王城――

「お呼びですか、イグニィドさま？」

1体の魔族がイグニィドの待つ謁見の間にやってきた。

「ああ、お前にはフィドルの首都であるスイゲフ地方に行き、そこに向かっているアルペンハイムの生き残り2人を抹殺してくる任務を頼みたい」

イグニィドは頷くと、魔王代行として、その魔族にベアトリクスとブルクハルトの抹殺を命じた。

「アルペンハイムの生き残りを？　確か、その者らはヴォルフリート様がこの国を壊滅させた際に捨て置かれた者ではなかったですか？」

予想だにしなかった指令に、言い渡された魔族はポカンとしながら聞き返した。

「ああ、その通りだ。だがヤツら、ヴォルフリート様がこの国を滅ぼしたときは“殺す価値もない”と捨て置かれるほど弱い存在だったのが、城を出てからの旅路の中で着実に強くなっている。今朝、フィドルとの国境にて、シーバがヤツらに襲いかかったが、返り討ちにあって殺られた。これ以上、我々の邪魔をされる前に排除しておかねば、やがて我ら魔王軍にとって厄介な存在になりかねないからな。バルドーレ、お前ならヤツらを始末できるだろう」

すると、イグニィドはそう命じた理由をその魔族――バルドーレに告げた。おそらく、フィドルの国境付近の詰所を襲っていた魔族がシーバという名なのだろう。

「へえ、あのシーバが殺られたんですか。――しかし、ヤツは力こそ優れていますが、頭が少々悪くて、時々自身の力を過信し、敵の力量も考えないで突っ込む面もあったので、そのスキを突かれたの

かもしれないですわね。まあ、よろしいですわ、この私にお任せください。数日のうちに、ヤツらの石像を持ち帰り、ご覧に入れましょう」

魔族バルドーレはイグニィドの言葉に感心したような表情になったが、すぐに苦々しい表情に変わった。それでもまたすぐに表情を戻すと自分に任せるよう、力強く請け負った。

「ああ、ヤツらの命を奪ってくればなんでもいいが、お前もなかなかの変わり者だな。いくら石化の魔力を持っているとはいえ、人々の石像をコレクションして面白いのか？」

イグニィドは頷きながらも、バルドーレの趣味に首をかしげた。

「ええ。同じように石化させても、その表情は千差万別で、特にじわじわと石化していくときの恐怖、もはやどうにもならぬと絶望に染まった表情なんて、思い浮かべただけでゾクゾクしてしまいます。おっと、ではそろそろ行きましょう。もたもたしていたらヤツらを見失ってしまいますから」

バルドーレは自分の趣味をひとしきり語ると、踵を返して謁見の間を出て行った。

「ふわあ～、よく寝たぁ～」

スイゲフの街を出て、ブルクハルトが大きなあくびをしながら背伸びをした。すでにお昼を過ぎているが、今日は2人そろって寝過ごしてしまっていたために、この時間の出発になったのだった。

「あふ、わたくしもまだ少々眠たいですわ……」

ベアトリクスもあくびをしたが、そこはさすがに元王女、ブルクハルトのような品のないあくびはしなかった。

スイゲフから国内の各地へ延びる整備された街道の内、セブ方面へ向かう道を歩き、スイゲフとセブの中間あたりにある小さな街、エストラが見えてくる頃。

「あれは……なんでしょう？　街の周りだけ妙な霧に覆われてるように見えるのですが……？」

ベアトリクスが下り坂の先に見えるエストラの街の様子がおかしいことに気づいて、指差しながらブルクハルトに訊ねた。
「確かに、変だな。ただでさえここらへんであんなに濃い霧が出たなんて聞いたことないのに、おまけに霧が出ているのは街の周囲だけで、街からそんなに離れてないこの場所も、そしてこの坂から見下ろせる街の先に続く街道でも、霧など一切出ていない。ん？　まさか……？　い、嫌な予感がしてきたぜ……」
ブルクハルトも頷き、理由を考えようとして状況を整理してみたところ、ふと思い当る節があったようで、冷や汗を流して顔をひきつらせた。
「ど、どうしたの、ブル？」
その深刻な表情にベアトリクスも不安になって訊ねると、
「先日、フリードリヒさんから受け継いだ魔王軍の情報によると、その中に人や物、全てを石に変えてしまう魔力を持つ灰色の霧を使う魔族がいるらしいんだ……」
ブルクハルトは、ヴァイセンの街でイグニィドとの戦いに敗れて命を落とした魔族フリードリヒから託された知識の中に、今の状況に合致しそうな存在があると告げた。
「そ、それでは、まさか……！？」
ブルクハルトの話を聞いて、彼が何を言いたいのかを察したベアトリクスの表情が変わった。そんな彼女にブルクハルトはひとつ頷くと、2人は一気に坂を駆け下りて、エストラの街へと急いだ。

「これは……なんて、ひどいんだ……」
街へたどり着く頃には霧は消えていたが、街へ飛び込んだ2人の目に映ったのは、ほぼ普段通りの様子を見せたまま石にされてしまった街の人々の姿だった。立ち話をして、笑い合った表情のまま固まっているおばさんたち、ペットの散歩で走っていた子供、出かけるために家の扉を半分開けた瞬間で固まっている男性など、この街に存在していた命あるもの全てが、冷たく灰色の石に変えられてし

まっていた。と、そこへ、
「他人の心配をしているなんて、余裕ね？　これからお前たちもアレと同じようになるというのに」
建物の陰から、１体の魔族が歩み出てきた。
「この街をこんなにしたのは、貴様か……？」
ブルクハルトは剣に手をかけながら、出てきた魔族に訊ねた。
「ええ、そうよ。私の名はバルドーレ。それで、この街を石にした私に、あなたはどうすると言うのかしら？」
魔族はバルドーレと名乗り、ニヤリと笑いながらブルクハルトに訊ねた。
「どうするか、だと？　そんなもの、聞くまでもないだろう。貴様を倒して、彼らの仇を討つ。それだけだ！　ブルクハルト＝コルネリウス、覚えておけ、貴様を斃す男の名を！」
ブルクハルトはバルドーレの問いに短く答えると、名乗りを上げながら剣を抜いて大上段から斬りかかった。
「ふん、愚かね……まあいいわ、もうすぐお前も私のコレクションに加わるのだから！」
バルドーレはくわっと目を見開くと、ガキィン、という音を立ててブルクハルトの剣を頭上で受け止めた。
「なっ！？」
白羽取りがごとく剣を受け止められたブルクハルトは驚きの声をあげながらも、一度退くため剣を抜こうとしたが、バルドーレはがっちり押さえこんでいて離さなかった。
「離してほしいの？　ほぅら、剣は離したわよ。――お前は逃がさないけどね！」
剣を退くため思い切り引っ張っているブルクハルトをあざ笑うかのように、バルドーレは突然剣から手を離した。その反動でブルクハルトの手が剣から離れ、空中に投げ出されたが、バルドーレが放物線を描くように落ちていくブルクハルトに右手を向けると、彼の身体が空中で静止した。

「んぐっ！　な、何をする！？」
ブルクハルトは逃れようとじたばた暴れたが、意に反してロクに身体は動いておらず、逆にバルドーレが右手の中指を軽く内側に曲げると、身体が浮いたままゆっくりとバルドーレのほうに引き寄せられていった。
「ブル、いま助けるわ！　“衝撃波（ショック・ウェイブ）”！」
ベアトリクスはブルクハルトのピンチを救うため、バルドーレに攻撃魔法を放った。
「ぐあっ！　……ふん、なかなかの使い手だが、しょせん人間ではこの程度が限界のようね。そんなものでは、この私の邪魔はできないわ。彼が終わったらたっぷり遊んであげるから、今は大人しく、仲間が石に変わるのを眺めていなさい！」
ベアトリクスの攻撃はバルドーレに直撃したが、以前に並の魔物を粉々に砕いたこの魔法でさえ、バルドーレをわずかにのけぞらせる程度しか効果がなかった。
「う、ああ……」
自分の剣はベアトリクスの近くの地面に突き刺さっており、自身は拘束されて身動きが取れず、さらにベアトリクスの魔法も効果がなかったとあって、もうバルドーレの目の前まで引き寄せられているブルクハルトは恐怖に震え始めた。
「ふふ、おびえなくても大丈夫よ。苦しいのは最初の一瞬だけで、すぐに石になって何もわからなくなるから……はむっ」
「ん、んぐっ！？」
ブルクハルトを目の前にして、バルドーレは軽く舌なめずりをすると、身動きを封じたままのブルクハルトの唇にキスをするように吸いつき、その口内に吐息とともにあらゆるものを石に変える悪魔の霧を吹き込んでいった。

13．魔王軍の刺客（2）

バルドーレに唇を奪われ、体内に石化の霧を送りこまれたブルクハルトの身体が足元からゆっくり石に変わり始めた、その時。

「うあああああああっ！　ブルを、は、な、せえええええ！！」

ブルクハルトがやられた、ということよりも、目の前で魔族などに自分の騎士の唇を奪われたことに激昂したベアトリクスが、地面に刺さっていたブルクハルトの剣を抜き、その勢いだけで下から振り上げてバルドーレの右腕を斬り裂いた。それによって、バルドーレの右腕とブルクハルトの身体は空中に投げ出され、ズザッ、という音を立てて地面に落ちた。その音でハッと我に返ったベアトリクスが剣を地面に突き刺すように放り投げてブルクハルトの容体を見てみると、意識を失ってこそいるが、ブルクハルトの石化の進行は停止していた。

「おのれ、よくも私の腕を……！　もうお遊びは終わりよ。私の全魔力を持って、お前たちを石に変えてくれる！」

右腕を失って、苦しげな表情を浮かべていたバルドーレはそう叫ぶと、残っている左腕一本を頭の上にかざした。すると、そこに魔力が集中し、霧のようなものが球体状に集束していった。

「あ、あれは……と、とにかく防御しないと！　“魔法抵抗膜（マジック・シェルター）”！」

ブルクハルトの意識はまだ戻らず、また先ほどバルドーレの右腕を斬り落としたベアトリクスの剣技も不意打ちだったからこそ通用したものだと彼女自身わかっており、真正面から斬りかかって返り討ちに遭うよりは、防御すべきと判断して、バリアを張る魔法を使った。

「そんなチャチな魔法で防ごうなど、片腹痛いわ！　食らいなさい、“石化の霧（ペトリファイス）”！！」

バルドーレはそんなベアトリクスを嘲笑すると、2人を軽く包み込んでしまえるほどに巨大になった球体状の霧を放った。

「きゃあっ！」
バルドーレの放った霧はベアトリクスのバリアごと包み込み、グッと押し込まれる感覚にベアトリクスは悲鳴を上げた。
「ふふ、そんな防御魔法で、いつまで持ちこたえられるか――な、なにっ！？」
自分の勝利を確信していたバルドーレは、高みの見物を決め込もうとしていた。しかし、
「大丈夫だ、ベア。何も、問題ない。さあ、バルドーレを倒そうぜ！」
意識を失っていたブルクハルトが突然の復活を遂げただけでなく、先ほどのバルドーレの攻撃で石化していた足先も、何事もなかったように治っていた。
「なぜだ！？　なぜ私の石化の霧を直接体内に吹きこまれながら、お前は石化しない！？」
どうやらバルドーレには霧の内部が見通せるようで、霧の中、ベアトリクスのバリアの内側で元気に立ち上がったブルクハルトに動揺を隠しきれず叫んだ。
「……意識を失っていたとき、フリードリヒさんの声が聞こえたんだ。“騎士（ブルクハルト）よ、お前には俺の知識とともに、あの時残っていたほんのわずかな量ではあるが、俺の魔力も託してある。それを開放し、呪縛を跳ね除け立ち上がるのだ”ってな。この1回でそれは使い切ってしまったからもう使うことはできないが、十分だ。さあ、行くぞっ！　覚悟はいいか、バルドーレ！」
ブルクハルトは自らの復活劇の種明かしをすると、先ほどベアトリクスが使い、地面に刺さっていた自分の剣を引き抜き、バルドーレめがけて走りだした。それとほぼ同時に、ベアトリクスのバリアがバルドーレの霧を相殺する形で打ち破り、空が晴れ渡った。
「そ、そんなバカな！　こ、この私が――」
バルドーレは必勝と確信していた石化の霧を打ち破られ、動揺している間にブルクハルトの剣によって頭から縦に真っ二つにされた。

しかし、斬り裂いたブルクハルトの剣も硬い魔族の皮膚を何度も斬ったことで限界が来ていたらしく、刃がボロボロと崩れてしまい、使い物にならなくなってしまった。
「か、勝った……でも、剣が壊れちまったか」
ブルクハルトはふらふらとその場で座り込むと、刃を失って柄だけになってしまった剣を眺めながら、勝利をかみしめていた。と、その時。
「ブル！　見て、街が……！」
ベアトリクスが驚いたような声をあげたので、ブルクハルトは言われたとおりに周囲を見ると、石化させられていた街が元の姿に戻っていくところだった。
「――あれ？　何が起こっていたんだ？」
「確か、いきなり街全体が灰色の霧に覆われて……？」
バルドーレが死んだことで石化が解けたらしいエストラの街の人々は、一様に首を傾げていた。
「あの、あなた方はこの街の者ではないようですが、旅の方ですか？」
そんな中で、壮年の男性が2人に話しかけてきた。
「はい、そうですが……？」
疲れた体に気合を入れ直して立ち上がると、ブルクハルトが答えた。
「では、この街に何が起こっていたのか、ご存知でしたらお教え願いたい。ああ、申し遅れました。私はここエストラの町長を務めている、ヘルマンという者です。あなた方は？」
男性はエストラの町長、ヘルマンと名乗り、単刀直入に訊ねた。
「わたくしはアルペンハイム出身のベアトリクスと申します」
「私はブルクハルト。ベアトリクスとともに旅をしております。それで、この街はつい先ほどまで、魔王軍のバルドーレという魔族の手に落ち、街ごと石にされておりました」
2人はそれぞれ名を名乗ると、この街に何が起こっていたかを包

み隠さず話した。
「そうだったのですか……。それで、その魔族は？　もしや、あなた方が……？」
ヘルマンはそれを聞いて合点がいったような表情になったが、ふと周りを見ても、見えるのはいつも通りの生活に戻りつつある街の人々と、旅人の2人だけという状況に違和感を覚え、2人に訊ねた。
「あー、はい。私たちが、討ちました。私たちがここに来た時にはすでに全てが石にされてしまった後で、失礼ながらこの街は全滅したのだ、と思い、何の罪もない人々を殺した魔族バルドーレを討つため戦っていたのですが、討ち滅ぼした後で皆さんが元に戻っていったのを見て、ホッとしています。でも、一応謝らせてください。勘違いとはいえ、皆さんが死んだと思い込んでいて、すみませんでした」
ブルクハルトは、そんなヘルマンに頷くと、街に着いてからの経緯を話し、石化させられていた街の人々を死んだと思い込んでいたことを謝罪した。
「なに、あなた方はこの街の恩人ですから、お気になさらず。ああ、そうだ。今夜はあなた方のために、宴を開かせてください。西フィドル特産のチンクル料理を振る舞いましょう」
ヘルマンは笑いながら言うと、2人のために特産料理を振る舞う宴を開くと言った。
「ありがとうございます。では、ごちそうになります」
ブルクハルトはその申し出を受け入れ、礼を言うのだった。

「んまいっ！」
「ええ、とてもおいしいですわ。ヘルマンさん、こちらのお肉がチンクルというものなのですか？」
日が暮れ、街の中央広場では街を救った英雄――ベアトリクスとブルクハルトのための宴が開かれていた。さまざまな料理が振る舞われた中で、ひときわ大きな鳥を丸焼きにした後食べやすく切り分

けた肉料理が特においしかったらしく、2人とも舌鼓を打ち、ベアトリクスはヘルマンに料理のことを訊ねていた。
「ええ、そうです。ベアトリクスさんはお気に召しましたか？」
ヘルマンは笑顔で頷くと、逆にベアトリクスに訊ねた。
「はい、わたくしたちのこの旅が終わったら、また立ち寄らせていただきたいですわ」
ベアトリクスはまたここへ来たいと思っているようで、ヘルマンの問いには即答で頷き、宴の夜は更けていった。

１４．さらなる旅路へ

一夜明けて、２人が泊めてもらったヘルマン邸の２階から下りてくると、

「ああ、おはようございます。ところで、お２人はどうして旅を？魔王軍の侵攻でお２人の出身地だとおっしゃっていた隣国アルペンハイムが滅びてしまったからでしょうか？」

ヘルマンは朝食の支度をしながら、２人に旅の理由を訊ねた。

「そうですね、私たちは首都アルペムに暮らしていたのですが、魔王軍によって街は跡形もなく破壊され、親もきょうだいも友人も全て失いました。ヤツらに殺されたみんなの無念を晴らすため、私たちは魔王軍と戦う旅に出たのです」

ブルクハルトはうまく自分たちの本当の出自を隠した上で、旅の理由をヘルマンに話した。

「そうだったんですか……。アルペンハイムが滅ぼされた際、国王様をはじめとする王族の方々はベアトリーセ姫を除いて全員死亡、ベアトリーセ姫も行方不明と政府のニュースで伺っております。もし、ベアトリーセ姫だけでも生き延びていてくだされば、もしかすると魔王軍に対抗する希望の星になってくださるかもしれないのですが……。ブルクハルトさんやベアトリクスさんはそのあたりのことは何かご存じではないのですか？」

ヘルマンはフィドル国民だが、隣国アルペンハイム王家の象徴ともいえた“魔法”の力を見たことがあるらしく、現在公式には行方不明とされているベアトリーセに希望を託したい、とアルペンハイムから来た２人に何か知らないかと訊ねた。

「いえ、残念ながらそれ以上のことは知りません」

ブルクハルトはここまできて素性を明かしてはなんのためにただの旅人を装ってきたのかわからなくなるので、何も知らないと答えた。

「そうですか……。ともかく、この街を救って下さったあなた方に私たちにできるお礼はそれほど多くないですが、これから先もっと困難な旅路へ向かわれるであろう勇者さまに、遥か古の時代にこの街を襲った危機を救った戦士が遺していった、と伝えられている剣を差し上げましょう」

ヘルマンはふと何か思い出したらしく、お手伝いさんに何か伝えてどこかへ走らせると、街を救った勇者――ブルクハルトに、古い時代の英雄を重ね合わせて、その英雄が使っていたらしい武器を持って行け、と話したところで、先ほどどこかへ走っていったお手伝いさんが立派な鞘のついた剣を持って戻ってきた。

「そんな大事なもの、いただけません――と言いたいところなのですが、折しも魔族バルドーレを倒した際に、剣が壊れて使えなくなってしまったので、お言葉に甘えて、この剣を使わせていただこうと思います。おぉ、古い剣と言う割にはよく手入れがされていて、使いやすそうですね。ヘルマンさん、ありがとうございます。……ん？　柄のところに何か文字が書いてある……ええと、バスター、ナイツ……？　この剣の名前だろうか……」

おそらく、ブルクハルトの剣がバルドーレとの戦いで壊れていなければ、この申し出は丁重に断っていただろうが、剣が壊れたことで武器を失ってしまったブルクハルトには、願ってもない申し出だった。と、剣を眺めていたブルクハルトは、柄に刻み込まれた銘に気づいた。

「バスターナイツ？　私たちは名前までは伝え聞いてないのでわかりませんが、あなたのような勇者さまに使ってもらえるのであれば、それを愛用していたであろう古の英雄も文句は言いますまい。――もう、行かれますか？」

ヘルマンは頷くと、荷物の確認を始めた2人に旅立つのか、と訊ねた。

「ええ、この先、この街のように魔王軍の手に落ち、人々が苦しんでいる街がないとも限りません。だから、行きます。私たちにどこ

までできるのか、まではわかりませんが、ひとつでも救える命があると信じて」
ブルクハルトは頷くと、もらった剣（バスターナイツ）を腰に差し、旅の荷物を背負い、ベアトリクスとともにエストラの街を後にした。

その頃、魔王城では――
「なに？　バルドーレも殺られた、だと？　それは本当なのか、ジェイル」
バルドーレを刺客として送りこんだ、魔王代行を務めているイグニィドが例の偵察要員の魔物・ジェイルの報告を受けて、まさか、という表情で聞き返した。
「はい。バルドーレ様は決して油断なさっていたわけではなく、兵士の男のほうがバルドーレ様の必殺技である石化の霧をまともに受けたにも関わらず、それを自力で打ち破り、バルドーレ様を真っ二つに斬り裂いたのです」
ジェイルはイグニィドの機嫌が悪くなるのを感じてビクビクしながらも、自分が見てきたバルドーレの最期を報告した。
「そうか。やはりヤツらの潜在能力と成長速度は確実に魔王軍の脅威になりつつある、か……。あの時に殺しておけばよかったが、今さら過去を悔やんでも仕方あるまい。次は俺自ら出るとしよう。ヤツらはどこへ向かった？」
イグニィドは変わり者ではあるが有能な魔族だったバルドーレの死を惜しみ、以前ヴァイセンでフリードリヒを殺した際に一緒に始末しなかったことを少しだけ後悔したが、すぐに気持ちを切り替え、次は自らが刺客として出陣すると宣言し、ジェイルに彼らの行先を訊ねた。
「連中はエストラを出たあとさらに西へ向かったので、おそらく、というかほぼ確実に行先は港のあるセブではないでしょうか。仲間の偵察部隊の情報では、我々がアルペンハイムを押さえているいま、この大陸から出るには、セブからの海路しかないようですので」

ジェイルは2人の向かった方角から行先を推理して、イグニィドに告げた。
「ふむ、港町セブか。ならば、セブからの船の行先はどこだ？」
イグニィドは少し考えると、ジェイルにセブからの航路を訊ねた。
「少々、お待ちを。――仲間の偵察部隊に念話で連絡を取り、調べてもらったところ、セブからは南のエリュアールは港町ルトースにしか航路が存在しない、とのことでした」
ジェイルは一旦数歩下がって、仲間の偵察部隊に念話で訊ね、情報を得てイグニィドに伝えた。
「そうか、わかった。下がっていいぞ。――しばらく一人になりたいから、誰も入ってくるな、と外のヤツに伝えてくれ」
イグニィドは頷くと、ジェイルを下がらせ、一人物思いにふけるのだった。

一方、セブを目指して西へ歩いているベアトリクスたちは、セブまでの最後の宿場町に差しかかろうとしていた、のだが。
「なにか、騒がしくないかしら？」
日が暮れ始めて薄暗い道を歩いていた2人の耳に、どこかで何か普通ではない声が聞こえて、立ち止まった。
「ああ、なんだろう……？　あっちだ！　いま、何か光った！」
ブルクハルトも荷物は背負ったまま、あたりを見回していると、少し離れた、森の中で何かが光ったのに気づいて、走り出し、ベアトリクスもそれに続いた。森へ飛び込んだ2人の目に映ったのは、10体ほどの魔物の群れと、それに囲まれながら奮闘する青年の姿だった。
「はぁっ！」
青年は1本の槍を手に、臆することなく魔物に立ち向かい、魔物の群れの中の1体に向かって勢いよく跳躍し、上空からまっすぐに突き刺して、見事仕留めてみせた。だが、仕留めたと言ってもまだ他の魔物がいる。1体へ攻撃している間にできたスキを見逃すはず

もなく、他の魔物が一斉に青年に襲いかかり、あっという間に形勢は逆転してしまった。
「た、大変！　ブル、行くわよっ！」
「おうっ！」
少し様子を見ていた2人は、青年のピンチに慌てて走り出し、戦闘に乱入した。ベアトリクスの衝撃波が青年の背後にいた3体の魔物を粉々に砕き、傷を負ってほとんど動かない青年の左腕側にいる2体はブルクハルトの剣が真っ二つに斬り裂いた。青年の正面と右側にいた残りの4体は、2人の乱入に驚いて動きが止まったところを青年の右腕に携えられた槍、ベアトリクスの杖、そしてブルクハルトの剣がそれぞれ打ち倒し、森の中は静寂を取り戻した。

15．港町セブ

「大丈夫か？」
ブルクハルトは満身創痍で立っているのがやっとといった具合の青年に肩を貸しながら訊ねた。
「ああ、大丈夫だ。助けてもらって、済まなかったな。俺の名はレオポルド。レオポルド＝エールリッヒだ。あんたたちは？」
青年は2人に礼を言うと、自己紹介をして2人にも名を訊ねた。
「私はブルクハルト。ブルクハルト＝コルネリウスだ」
「わたくしはベアトリクスよ。ベアトリクス＝リアハイム。ところで、あれほどの魔物に囲まれるなんて、何があったのですか？」
2人はそれぞれ自己紹介をすると、ベアトリクスがレオポルドに訊ねた。
「ああ、俺はここから少し北にあるマニエール、ってところに住んでいたんだが、隣国アルペンハイムがやられたことで世界中に魔王のしもべの魔物たちが散らばったのは知ってるよな？　それで、実際マニエールの街にも何度も魔物の襲撃があった。倒しても倒しても一向に減らないもんだから、だったら元を断ったほうが早い、ってんで、魔王を倒すための旅に出たんだが、次々に仲間を呼んで増える魔物に苦戦してるところに、あんたたちが現れた、ってわけだ。じゃあ逆に聞かせてもらうが、あんたたちはこんなところで何を？」
レオポルドはこれまでの事情を2人に話し、逆に2人にも訊ね返した。
「私たちも、いろいろあって魔王を討伐するための旅をしている。もし良かったらだけど、一緒に行くか？」
ブルクハルトは、旅の理由を軽くレオポルドに話すと、同行するか訊ねた。
「そう……だな。このまま俺1人で戦っても、さっきみたいに囲まれて終わるのが関の山だろう。じゃあ、これからよろしくな。俺の

ことはレオと呼んでくれればいい」
　レオポルドは少し考えるそぶりを見せたが、先ほどの状況に思い至って、ブルクハルトたちとともに行くことを決断した。
「ああ、よろしく。私のことはブルと呼んでくれ」
「よろしくお願いしますわ。わたくしはベアと呼んでください」
　２人は笑顔でレオポルドを歓迎し、３人でがっちりと握手を交わした。

「え！？　じゃあ２人はあのアルペンハイムの生き残り！？　しかも、ベアは公式には行方不明になっている王女様！？」
「ちょっと、レオ声が大きい！　バレないようにやってるんだから、驚くにしてももっと静かに！」
「大丈夫よ、ブル。近くには誰もいないようだから。それで、わたくしの本当の名前は、ベアトリーセ＝リア＝アルペンハイム。でも、すでにアルペンハイムの国は滅び、わたくしはもう王女の身分にはないわ。それでも、ベアトリーセの名で旅をするには、少々不便であるために、先ほど名乗ったベアトリクス＝リアハイム、という仮の名を使っているのです。だからレオ、わたくしに敬語など必要ない、ということは覚えておいてね。あと、わたくしが正真正銘のアルペンハイム王国の元王女だった、という証明として、遥かな昔から王族に代々受け継がれてきた“魔法”のうち、あなたの傷を癒す回復魔法（ヒール）を使いましょう」
　道すがら、２人は新たな旅の仲間として加わったレオポルドに、自分たちの本当の出自と旅の目的を話したところ、２人の正体を知った当然の反応としてレオポルドが驚いて大きな声を上げたため、ブルクハルトが苦言を呈し、ベアトリクスが彼をたしなめつつ、それに関する詳細な話をレオポルドにした上で、敬語は使わないで、と頼み、傷だらけのレオポルドに回復魔法をかけた。
「おっ、すげぇ、傷も痛みもなくなった！　ありがとう、それで、事情はわかった。もともと敬語とかあまり使う生活じゃなかったか

ら、正直安心してる。しかし、さっきの戦いぶりからただ者じゃないとは思っていたけど、まさか魔法とかいうよくわからない力を使うらしいアルペンハイムの王族と近衛兵だったとはな……」
　レオポルドは頷きホッと一息ついたところで、改めて2人の正体に驚きの声を上げた。
「まあ、あの襲撃でアルペンハイムの民は皆殺しにされ、ベアトリーセ王女のみ行方不明、というのが公式の情報である以上、その生き残りと行方不明の王女が魔王軍と戦うために旅をしている、と言われればそりゃ驚きもするか。ベアの魔法だって、普段から見慣れてる私にとっては、特に何か思うこともないけど、祭などでアルペンハイムを訪れて初めて目の当たりにした他国の人々は毎回驚かれるし、ごく自然の反応なんだな」
　ブルクハルトは顔見知り以外で初めて自分たちの正体を明かしたレオポルドの反応に、新鮮さを感じていた。

　その後、3人でセブまでの最後の宿場町であるレイオルで一休みし、翌日の夕方前、3人はフィドル共和国南西の港町セブにたどり着いた。しかし、
「なんか、妙だな……？　港町にしては、活気がないというか……。なあ、レオ？　レオはここに来たことはあるのか？」
　ブルクハルトがまず首をかしげ、唯一のフィドル国民であるレオポルドに訊ねてみた。
「ああ、俺は毎年エリュアール王国で開催されていた武芸大会に出場していたから、そこに行くために必ずセブには来ていた。けど、以前はもっと賑わっていたはずだ。お、ちょうどいいや。ちょっと待ってろ……おーい、おやっさん！」
　レオポルドは頷いたが、やはり違和感を覚えたらしく、2人をその場に待たせたまま、近くにいたいかつい男に話しかけた。
「おぅ、レオじゃねえか！　どうした、こんな時期にセブへ来るなんて珍しいな。いつもの大会はまだ先だろう？」

男は振り向いてレオポルドに気づくと、驚いた顔で歩み寄ってきた。
「ああ、今日は大会とかじゃなくて、魔王軍と戦うための旅に出たんだ。ここに来る少し前に、アルペンハイムから来た2人組に助けてもらって、その仲間に加えてもらう形で、な。そんでおやっさんに聞きたいんだが、この街に何があったんだ？　去年来た時のような活気はないし、それにおやっさんだって、その足……ケガしたのか？」
レオポルドは男にかいつまんで事情を話すと、2人を呼んでから単刀直入に訊ねた。
「そうか、お前は槍の扱いに関してはフィドルでも有数の実力を持ってるからな。じゃあ、ちょいと頼まれてくれねえか？　実はよう、少し前からおれたち漁師にしろ、定期船の運航にしろ、とにかく船を出すと、ものすごい勢いで魔物が襲いかかってくるようになってな。幸いにもまだ船が沈んだり、死人が出たりはしてないが、定期船に乗っていた乗客やら船員、それにおれたち漁師でも、多数のけが人が出ちまって、今は全ての船が止まっている状況ってわけよ。定期船が動かなければ、エリュアールとの交易も滞るし、おれたち漁師が漁に出れなければ、生活そのものが危うい。おれの足も、漁の最中に襲ってきた魔物との戦いでやられた。済まないが、そいつを退治してほしい。敵はバカでかいイカみたいなヤツだった。やって……くれるか？」
男はひととおりの事情を説明すると、3人に頭を下げた。
「お、おやっさん。そんな、頭なんて下げないでくれよ。俺はもちろんやるつもりだが、ブルとベアはどうだ？」
レオポルドは頭を下げた男に慌てた様子で言うと、2人に訊ねた。
「もちろん、構わないよ。目の前で困っている人を放っておくことなんてできやしないからな」
「ええ、そうね。それに、この問題を解決しないと海を越えられなさそうですものね。わたくしたち3人で、魔物を退治しましょう！」

２人も快諾し、一度作戦会議をするために宿に入るのだった。

16．セブ港・海上戦（前編）

「じゃあ、作戦、というほどのものでもないけれど、この街で一番頑丈な船を出してもらい、それに乗りこんで戦いに赴く。これで行こう」

宿で、ブルクハルトたち3人に、先ほど事情を説明してくれたレオポルドの知り合いの漁師の男の4人は作戦を立てていた。男を加えたのは、この街でのコネがない3人とのパイプ役になってもらうため。

「そうだな。海に出ないとヤツが襲ってこない以上、退治するためにはこちらが出向かないとならねえ。頑丈な船は、定期船に使用している船を使うのがいいだろう。ちょっとやそっとの嵐程度なら十分耐えうる性能があるからな。それで、その船の操縦はおれが引き受けよう。漁師として海に出れば、あんな化け物ほどではなくとも、厄介なエモノと格闘戦のようなことになるのは日常茶飯事で危険な目には慣れてるからな。任せてもらおう」

作戦の概要を決めたブルクハルトに男は頷くと、使用する船などの細かな部分を補完した。

「ああ、おやっさん。済まないな」

レオポルドが男に頭を下げると、

「なに、頭を下げなきゃならんのはこっちのほうさ。元はと言えばこっちの街の事情にお前らを巻き込んだんだ。このくらいのことはさせてくれ。そっちの、アルペンハイムから来たと言う2人も、申し訳ねえが、頼んだぜ。おれの命、お前ら3人に預けた」

男はそんなレオポルドの頭を上げさせると、逆に3人に対し頭を下げた。

「私たちは魔王を討つために戦っていて、魔王軍に苦しめられている街があるなら、出来る限りのことをするつもりです。漁師さん、あなたと街の人の命、このブルクハルトが確かに預かりました」

「ええ、これはお互いのためになることですもの。わたくしたちは海を越えてエリュアールに行きたい。この街の方々は生活のために海の安全を確保したい。となれば、多少なりとも戦いの心得があるわたくしたちがそれに協力させていただくのが筋というものですもの。わたくしベアトリクス＝リアハイム、魔物退治を確かに引き受けましたわ」

ブルクハルトとベアトリクス、それぞれの言葉で待ち受ける戦いへの意気込みを語り、夜は更けていった。

「……と、いうわけだ。例の化け物イカを退治するため、船を出したい。確か、老朽化で引退した船の代わりになる新たな船が先日進水式を行っていたよな？　その様子はちらっと見せてもらったが、あの船なら化け物イカの攻撃にも耐えきれる。社長、その船のカギを貸してくれ」

翌日、男は3人を連れて港へ行き、政府が直轄している定期船の運航を取り仕切る会社を訪れ、事情を説明して船のカギを要求した。

「あの魔物をどうにかしたいのは我々とて同じ。だが、あの巨大な魔物をそのような若者、それもたった3人で退治できるのか？　しかも、まだケガが完治していないお前が船の操縦をするつもりだと？　本当に大丈夫なのか？　すまん、お前の腕を信頼していないわけではないが、そのケガのこともあって、おいそれとはカギを渡すわけにはいかないんだ。船自体は沈められたとしても、まだ造ればいい。だが、お前を失うことはセブの街全体の大きな損失になるからな」

しかし、運航会社の社長は首を縦には振らず、渋い顔で男を含めた4人に問いかけた。

「そう来ると思ってたぜ。だがな、まずおれのケガは心配無用だ。もうほとんど治りかけだが、医者がうるさいから大事を取って未だにこんなクソ面倒な包帯を巻いているだけだ。で、こっちのレオはフィドルで一番の槍使い。全世界でも5本の指に入る実力者だ。そ

して、残りの2人はアルペンハイム出身で、その詳しい経歴は不明だが、つい先日、ここへ来る前に立ち寄ったエストラの街を魔王軍から解放してきたらしい。社長、確かあんたにはエストラに弟がいるんじゃなかったか？」

男と定期船の会社の社長はどうやら顔なじみのようで、社長がすぐには頷かないことを予測していた男は、あらかじめ3人に聞いておいた、「これまでの実績」を挙げ、交渉のカードとして場に引っ張り出した。

「う、うむ……ん？　どうした？」

社長がひとまず頷き、席を立とうとしたところに、社長の秘書を務めている女性がノックとともに入室し、その手に携えていた手紙のようなものを社長に手渡した。

「……失礼。ちょうど、その弟からの手紙のようだ。急に手紙なんぞよこして、どうしたんだ、ヘルマンのヤツは……？」

受け取った手紙の差出人は社長の弟だったらしく、唐突に届いた手紙に首をかしげながらも、社長は封を開けた。

「――――ッ！　……なるほど、わかった。船のカギを預けよう。私の弟、ヘルマンとあれが町長を務めているエストラの街を救ってくれたんだな。私からも、礼を言わせてくれ。ありがとう。そして、兄弟で世話になって済まないが、この街の化け物イカ退治もよろしく頼む」

手紙に書かれていた内容に、社長は驚いて立ち上がるとそのままカギを保管している板が掛かっている壁の方へ歩き、そこからカギをひとつ取り、男に投げ渡した。どうやら、エストラにいるという社長の弟は、エストラの街の町長を務めているヘルマンのことだったらしく、彼と街を救ったブルクハルトたちに改めて礼を言った上で、正式に化け物退治を3人に依頼するのだった。

「それじゃ、出航だ！　準備はいいか！？」

「おう！」

「ええ、参りましょう！」
「はい、お願いします！」
４人は船に乗り込むと、操縦を務める漁師の男の号令のもと、セブの港を出港した。港を離れて間もなく、船の真下に巨大な影が出現し、それとともに穏やかだった海が荒れ始めた。
「く、来るぞ……」
舵を握る男が、少しおびえたような声を出した、次の瞬間。船の真下にいた巨大な影は、船を追い越すように前へ出ると、一気に海面に飛び出した。
それはそのまま船首部分にしがみつき、もはや丸太でさえ軽々とへし折ってしまいそうな太い足を3本、甲板を攻撃するために自由にさせていた。
「で、でかい……お？」
目の前にいる化け物イカのあまりの大きさに、ブルクハルトが唸ったが、直後に首をかしげた。すると、
「グオオオオ！」
化け物イカが先制攻撃を仕掛けてきた。まず、水面から出していた3本の足のうち2本を真上から3人に叩きつけてきた。
「ふっ……！　――――！？」
だが、3人は素早く散って、直撃を避けた。誰もいない場所に叩きつけられたイカの足、しかし、次の瞬間。2本を避けて安心していたブルクハルトとレオポルドが吹っ飛び、船室の入口に叩きつけられた。どうやら、残していた1本を時間差で横へ薙ぎ払うように打ち付けたようだった。
「つぅ……っ！　さすがに効いたぜ、今のは……」
「ただデカイだけのイカだと思ってたが、なかなかの知能も備えているようだな。ちょっと甘く見過ぎていたかな。それと、みんな。コイツは魔王軍とは関係がないかもしれない」
２人とも、一撃で結構なダメージを負わされたように見えたが、すぐに立ち上がると、ブルクハルトが唐突に気になる発言をした。

「え？　どういうこと？」
ベアトリクスが攻撃しようとしていたのを中断して聞き返すと、
「例の知識の中に、こんなヤツはいない。もしかしたら、フリードリヒさんが知らなかっただけなのかもしれないけど、自分の中でも、コイツはこれまでに戦ってきた魔物とはどこか違うように思うんだ。もっとも、実際に街が被害を受けている以上、倒すべき敵であるのは変わらないけど」
ブルクハルトは理由を話すと、仕切り直しとばかりに剣を構え、それに合わせてレオポルドも携えた槍を構え、戦闘態勢に入った。
「そうね。それでは、ブル、レオ、行きますわよ！　“電撃の矢（サンダー・アロー）”！」
ベアトリクスは2人のダメージを心配しながらも、イカへの反撃を優先し、放電で金色に輝く矢を放った。
「オオオオン！」
「い、今のは……なんだ？」
矢はイカの頭部に命中し、感電したイカは苦悶の声を上げ、それを間近で見ていた、事情を何も知らない漁師の男が驚いていた。
「おやっさん！　事情は後で全部説明する！　だから今は何も聞かないで、舵を頼む！」
今にも舵を手放して甲板に下りてきそうな男に、レオポルドが叫んだ。
「よしわかった！　船のことはおれに任せろ！」
男はレオポルドの叫びにハッとすると、再びしっかりと舵を握り、甲板で戦う3人を励ました。
「まずは、その厄介な足をぶった切る！　行くぞ！」
イカが感電し、痺れている間に、ブルクハルトがイカの懐に潜り込み、足のうちの1本に5連続で斬りこんだ。
「グルオオオオ！」
しかし、丸太よりも太いイカの足を切断するには至らず、逆に麻痺から回復したイカの足がブルクハルトを襲った――

17．セブ港・海上戦（後編）

「ブルッ！　間に合って！　“光の盾（プロテクト）”！」

ブルクハルトの危機に、ベアトリクスが防御の魔法を使った。しかし、わずかに間に合わず、ブルクハルトは激しく吹っ飛んだ。

「ぐ、うっ……！」

それでも、ブルクハルトは立ち上がった。全身に傷を負い、剣を握る手もおぼつかない状態だが、気を失わなかったのは、ベアトリクスの防御魔法が少しでもイカの攻撃の威力を弱めてくれたからだろうか。

「ブル、少し休んでな。なーに、ベアに回復させてもらうくらいの時間は稼いでやるよ。それじゃ、行くぜっ！」

ほとんど立っているのがやっとであるほどボロボロのブルクハルトだが、それでも闘志を失わず、イカに立ち向かっていこうとする姿の痛々しさに、レオポルドがブルクハルトを軽く突き飛ばすような形で後方のベアトリクスに預けると、勢いよくイカに向かって走り出した。

「ブル、惜しかったわね。まだ、頑張れるかしら？　“上回復魔法（トゥワイヒール）”」

ベアトリクスはブルクハルトに優しく微笑むと、効果の高い回復魔法をかけた。

「ありがとう、ベア。それで、ヤツを倒すために、ひとつ相談がある」

「はっ！」

イカに向かって突っ込んだレオポルドは、代わる代わる叩きつけられるイカの足を左右のステップで華麗に避けながら、少しずつイカとの距離を詰めていき、イカの目の前――甲板の先端で大きくジャンプすると、イカの左目の部分に槍を突き立てた。

「グギャオオオ！」
レオポルドの攻撃により片目を潰されたイカは一度船から離れて、激しく暴れていた。それによって大波が発生し、船も大きく揺れていたが、舵を握る男の操舵技術で転覆することなく持ちこたえていた。

「相談？　改まって、どうしたの？」
真面目な顔で話を切り出したブルクハルトに、ベアトリクスは首をかしげた。
「さっき、ヤツに斬りかかったとき、かなり斬りつけたはずなのに、一向に切断できる気がしなかった。ベアの魔法もそれなりの効果はあげてるけど、決定打には至っていない。それで考えて、ひとつ思い出したんだ。陛下は魔法も剣も使いこなし、時に魔法の力を剣に宿らせる、魔法剣を使っていたことをね」
ブルクハルトはイカを倒すための秘策として、かつてアルベルトが使っていた魔法剣を挙げた。
「そういえば、お父様は器用な方で、魔法と剣の合わせ技を独自に編み出した、と話してくださったことがあったわ。ブル、それをわたくしたちで再現しようと言うの？」
ベアトリクスも父王アルベルトが魔法剣の使い手だったということを思い出すと、ブルクハルトに訊ねた。
「そう。私たちは独力では陛下のように魔法も剣も使いこなせはしない。だけど、私の剣とベアの魔法、ふたりで力を合わせれば、陛下のマネ事くらいはできる。さあ、ベア！」
ブルクハルトは頷くと、ベアトリクスに左手を差しだした。
「わかったわ、やってみましょう！」
ベアトリクスも頷き、その左手を握った。
「――待たせたな。レオ、大丈夫か？」
話を終え、ひとりで戦線を守っていたレオポルドのところに戻ると、

「おう、大丈夫だ。それより、ずいぶん長かったが、何かあったのか？」
　レオポルドは何発か攻撃がかすった程度の傷を負っていたが、大事はないようだった。イカのほうは、レオポルドの攻撃で多少ダメージは負っていたものの、まだまだ体力は有り余っている様子だった。しかしよく見ると、わずかではあるが、さっきより動きが鈍っているようだ。
「ああ、ヤツを倒すためのとっておきの秘策を準備してた。ベア、準備はいい？」
　ブルクハルトはレオポルドに応えると、軽く後ろを振り返り、ベアトリクスに訊ねた。
「ええ、いつでもいいわよ」
　ベアトリクスはすでに杖を手にし、いつでも魔法を放てる様子で頷いた。
「よし、行くぞっ！　ベア、やってくれ！」
「ええ、行きますわよっ！　剣に宿りなさい、“雷力補助（アシスト・サンダー）”！」
　ブルクハルトが剣を頭上に掲げて走り出すと同時に、後方のベアトリクスから激しく放電する電気エネルギーが放たれた。それはブルクハルトの剣に着弾し、刀身が輝きだした。
「おおっ！」
「くらえ、電撃の魔法剣（サンダー・ブレイド）！」
　ふたりの息の合ったコンビネーションに、レオポルドが驚きの声を上げる中、ブルクハルトは先ほどのレオポルドと似たように甲板の先端部、船首の柵を踏み台にして高くジャンプし、イカの頭頂部よりも高度を取ると、剣の切っ先を下に向けて、残っているイカの右目めがけて一気に降下した。
「グオオオ！」
　対するイカも、ブルクハルトを迎撃するために足を2本まとめて振り上げた。しかし――
「シギャアアア！」

イカの足がブルクハルトの剣が纏う金色の光――すなわち電撃――に触れた瞬間に電撃のエネルギーがイカの全身を駆け巡り、さらに剣そのものもブルクハルトの狙い通りにイカの右目を貫いたために、イカがさっき以上の苦悶の叫びを上げて暴れだし、ブルクハルトは剣をイカに刺した状態のまま弾き飛ばされた。幸いにも船のほうに飛ばされたために、甲板に叩きつけられはしたものの、無事だった。

「お、おい！　見ろ、イカが……！？」

ブルクハルトが起き上がるのと同時に、舵を握る男が前方――イカのほうを指して狼狽の色を見せた。

『えっ！？』

その声に、３人がイカのほうを見ると、ボロボロになったイカがみるみるその大きさを縮めていき、ついには普通のイカより少し大きいだけの、ベアトリクスでも両手で持てるほどの大きさになってしまった。驚いてそれ以上の声も出ない４人をさらに驚かせたのは、そのイカが何事もなかったように海面から跳び上がり、甲板に着地したことだった。よく見ると、潰れていたはずの両目もしっかりと開いていた。

「――はっ！」

４人の中でいち早くレオポルドが平常心を取り戻し、イカにトドメを刺そうと、槍を握りなおした、その時。

＞待ってください！＜

なんと、イカがしゃべった。予想外のことばかりが続けて起こったせいで、レオポルドの手から槍が離れて甲板に転がった。

＞まずは、皆さんに謝らないとならないですね。実は私、ここの近海のイカのヌシと呼ばれておりましたが、最近、怪物どもに海を荒らされ困っている、と仲間から相談を受けて、怪物どもをここから叩き出すために、わずかな手勢を引き連れて行きました。しかし、恥ずかしながらそこで逆に怪物ども――魔王軍のドス黒い魔力に染められてしまい、それによって身体が巨大化し、皆さんを自分の意

思とは関係なく襲うことになってしまっていたのです＜
　イカは流暢な言葉で事情を説明し、４人に謝罪した。
「お前も魔王軍の被害者だったのか……。それで、お前を魔物化させるきっかけになった連中はどこにいるんだ？　それこそがここでの黒幕、真に倒すべき敵だろう？」
　ブルクハルトはまだ半信半疑ながらも、イカに問いかけた。
＞そいつらは……もういません。連中にとっては、魔物化した私をこの地方を征服するための尖兵に使うつもりだったのでしょうが、魔物化したての私が暴走し、連中をまとめて粉砕してしまったのです。結果的には、その暴走が今日あなたがたに止めていただくまで続いてしまい、ある意味で連中の目論見はうまくいったと言えるでしょうが、私に殺されたのは誤算だったはずです＜
　イカは静かに話した。その表情は先ほどまでより一層ここにいる４人やセブの街の人々に対して申し訳ないといった様相を呈していた。
「じゃあ、これでこの海は平和を取り戻し、セブの街から出る定期船や、おやっさんたち漁師の船も安心して海に出られる、ということでいいのか？」
　ここで、黙って話を聞いていたレオポルドがイカに訊ねた。
＞ええ、見ての通り私は皆さんにコテンパンに叩きのめされたことで魔物の心を失い、元通り、ただのイカのヌシに戻りました。今後は、ヌシとしての立場も引退し、海底で静かに暮らしていきます。それでは、私はこれで失礼します。どうか、お気をつけて……＜
　イカはレオポルドの質問に頷くと、一礼して海へダイブし、姿を消したのだった。

１８．期待と不安の旅立ち

結局、化け物イカを討伐すると意気込んで港を出港した４人だったが、戦闘が予想外に微妙な決着をしたせいで、笑顔での帰港とはいかなかった。それでも、４人が船から下り、待っていた街の人々や船を提供した定期船の会社社長、そして４人が出港した後でこのことを知ったセブの街の町長に向かって事態の解決を宣言すると、そこかしこから歓声が沸き起こった。

４人の帰港が夕暮れだったこともあり、それから社長の全面的な出資のもとで、豪勢な宴が開かれた。その席で、ほぼ完治していた漁師の男の包帯も正式に外すことを許されたおかげで宴は男の快気祝いも兼ねることになり、その日は朝まで街中が賑やかな空気に包まれていた。

――そして、夜が明けた。

「……そうか、それで全て合点がいった。アルペンハイムのお姫様と、お付きの兵士。そりゃ戦いの経験もあるし、イカとの戦いで見せてもらったあの不思議な力も納得がいく。でも、なぜ正体を隠しているんだ？　あんたたち、って言っちゃいけねえか。２人は魔王に殺された人たちの仇を討つために戦っているんだろ？　単なる漁師のおれにはわからない世界なのかもしれねえが、正義のために戦うんだったら、もっと堂々と、勇者を名乗るくらいでもいいんじゃないのか？　少なくとも、あのイカから街を救ってくれた３人は、おれやこの街の連中にとっては偉大なる勇者様だと思ってるぜ」

男は３人の説明に深く頷くと、逆に３人に訊ねた。

「確かに、わたくしたちはこれまでの戦いの中で、結果としていくつかの街を魔王軍から救い、感謝されてまいりました。ですが、わたくしたちは自らあなたのおっしゃるような“勇者”になろうとは

思いません。これはアルペンハイムの国を出る際にブルクハルトとも話したことなのですが、仮にわたくしたちが正体を隠さず旅をしていれば、魔王軍に媚を売るような外道な輩がわたくしたちを魔王軍への生け贄として差し出そうと暗躍することも考えられます。わたくしたちには魔王軍と戦うための力はありますが、その矛先をいくら外道な輩とて、同じ人間には向けたくないのです。それに、むやみに魔王軍を呼び寄せ、周囲の人々に被害を与えることにもなりかねません。ですので、できれば今日ここで知った、わたくしたちの正体は他言無用でお願いいたしますわ」

ベアトリクスがその理由をきちんと説明した。

「なるほど、そりゃ一理あるな。わかった、おれは2人の出自の話は聞いたが、他人に話すことはしない。だが、レオも含めた3人の勇者が街を救った、ということは言っても構わないだろう？」

男はベアトリクスの説明に納得したように頷くと、正体を周囲には内緒にする、という頼みも快く聞き入れたが、ひとつだけ妥協を求めた。

「そうですね、そこまでは止める権利がない、というかあったとしても止めようがないものですから、それは構いませんよ。少し、気恥ずかしいものはありますが……」

ブルクハルトは頷くと、苦笑いで応えたのだった。

「それじゃあ、この街を救ってくれた勇者様たちへのお礼として、ルトースまでの船賃はいただきません。出発も、融通をきかせますので、出発の準備が整ったら、またここへおいでください」

男との話を終え、3人が港の中にある、定期船のチケットの販売所へ行くと、定期船の会社の社長が待っていて、そう切り出した。

「えっ、いいんですか？」

予想してなかった申し出に、ブルクハルトが聞き返すと、

「ええ、もちろんです。あなたがたがいなかったら、船を運航できずに私どもの会社は倒産していたかもしれないのですから。むしろ、

これでもまだお礼としては少ないくらいだと思っております」
社長は力強く頷き、他に何かお礼としてできることはないかと考えるそぶりを見せ始めた。
「いえ、これ以上はお気持ちだけで十分です。本当に、ありがとうございます。では、お言葉に甘えて、船賃はお世話になります。それで、と。どうする？　出発する前に、少し街を見ていく？」
ブルクハルトは社長に礼を言うと、2人に訊ねた。
「そうね。せっかくだから、少しだけ見て行きましょう。レオ、案内してもらえる？」
ベアトリクスは頷くと、レオポルドに街を案内するよう頼んだ。
「ああ、いいぜ。じゃあ、行くか」
レオポルドは即答で頷くと、3人で固まって港のチケット売り場を出て、街へと戻っていった。

やはり、化け物イカを退治したブルクハルトたち3人は街のどこへ行っても英雄扱いで大人気、周囲には人の姿が絶えなかった。そんな中、一通り街を見て回った3人は、そろそろ出発するつもりで、港へ向かっていた。
「――あんたたち、ちょいと待ちな」
間もなく港が見えてくる、というあたりで、3人は建物と建物の間にひっそりと佇んでいた老婆に呼び止められた。
「――ん？　ばあさん、今呼び止めたのは俺たちか？」
ブルクハルトとベアトリクスは街の人との会話に夢中で気づいていないようだったが、確かに呼び止められた、と思ったレオポルドが足を止めて老婆に訊ねた。
「ああ、あんたたちだよ。あんたたちだろ、バカでかいイカを退治し、これから南のエリュアールに旅立つ、ってのは？」
老婆は頷くと、改めて3人に確認をとった。
「あ、ああ……確かにそうだが、それがどうかしたのか？」
あまりに的確に言い当てた老婆に少々困惑気味ながらも、レオポ

ルドが頷き、問い返すと、
「あたしゃこの街で占いを生業にしているんだが、どういうわけかあんたたちの未来が勝手に映し出された。いいかい、よく聞きな。――あんたたち3人は、これからそう遠くないうちに、大きな困難に見舞われる。残念だが、回避する手段はなく、確実に起こる未来だ。しかし、回避する手段はなくとも、乗り越えるための手段はある。そのカギとなるのは、どうもはっきりとは見えなかったが、1人の少女のように見えた。これを信じるかどうかはあんたたちの自由だが、あたしの占いは良くも悪くも当たる確率が高い。この先、くれぐれも気をつけてお行き」
自らを占い師だと言った老婆は、3人にとって衝撃的な言葉を告げた。
「大きな困難、しかも回避不可能。信じない、と決めつけるのは簡単ですが、気になりますわね。……うん、おばあちゃん、ありがとうございます。完全に信じるか信じないか決めることはできませんが、一応気をつけてみますわ。ええと、お代はおいくらかしら？」
ベアトリクスは老婆の言葉のうちいくつかを反芻し、考えていたが、最終的には、一考の価値がある、という結論で片付けることにし、老婆に礼を言って代金を訊ねた。
「いらないよ。なぜか勝手に映し出された未来が、あまりに不吉なものだから伝えるべきだと思っただけの話さ。じゃあね、どんな困難に襲われるかまでは占いには出なかったけど、負けるんじゃないよ」
老婆は金の受け取りを拒否し、3人を激励すると、商売道具の水晶玉を片付けて人ごみの中へ消えて行った。
「……行くか」
3人はしばしそんな老婆の背中を見送っていたが、完全に人ごみの中に隠れたころ、レオポルドが2人を促し、港へ向かう歩みを再開させた。

「よーし、帆を張れ！　錨を上げろ！　出航だ！」
３人が船に乗り込むと、数日ぶりに通常運航に戻る定期船の第一便は、セブの港を出港した。
「次は島国、エリュアール王国か。どんなところなんだろうな？　なあ、確かレオはエリュアールで開かれる武芸大会に出てたんだよな？　エリュアールってどんなとこなんだ？」
甲板の先――化け物イカと死闘を繰り広げた場所――で風に当たりながら、ブルクハルトがつぶやき、レオポルドに訊ねた。
「ああ、そうだな。エリュアールはアルペンハイムほど発展してはいないが、フィドルのような田舎でもない、ほどよく都会と田舎が混在している国だ」
レオポルドはエリュアールという国が持つ特徴を大雑把にブルクハルトに話した。
「へえ～、それはいいな。今から待ち遠しいよ」
「そうなのですか、それはとても楽しみですわね。でも、先ほどのおばあさんの占いのこともあるし、浮かれてはいられないわよ、ブル」
ベアトリクスも楽しみなようではあったが、彼女はブルクハルトと違い、先ほどの占い師の老婆の言葉があるせいで、心の底から楽しみだとまでは思えないらしく、はしゃぎまくるブルクハルトをたしなめた。
「そ、そうだな。まあ、なんにせよ、さらばアルペンハイム大陸、ってところだな」
ブルクハルトは少し顔を赤くして頷くと、背後に広がる生まれ育ったアルペンハイム王国がある大陸を振り返り、大きく手を振るのだった――

１８．期待と不安の旅立ち（後書き）

長らくお待たせしておりましたが、第３章の開始となる第１９話を９月１８日（日）０時に更新します！

１９．襲い来る強敵（前編）

ベアトリクスたち３人を乗せた、セブとルトースを結ぶ定期船は、セブ港を出港してからおよそ半日ほどの航海を経てルトース港に到着した。魔王軍侵攻の影響による混乱からか、入国審査がほぼザルに等しいほど非常に簡素化されたものであったためにあっさりとパスし、休息のために３人は宿に入った。

「明日、ここを出発したらこの国（エリュアール）の王都ホルッターを目指すのか？」

夕食後、男２人の部屋でこれから先の方針を話し合おうということになったのだが、そこで早速レオポルドが話を振った。

「そうね、特にこの街（ルトース）にとどまる理由もないから、明朝、ホルッターへ向けて出発しましょう」

それに対し、ベアトリクスは頷きながら答えた。

《エリーズよ、旅立つのです。あなたの力を必要としている人がいます。私たちはいつもあなたとともにあります。必要な時には存分に私たちの力を使いなさい》

「はい……！」

東の大陸の中央に位置する、険しい山々に囲まれた山岳国家、カレーナ共和国。その南部、フェアフォックス王国との国境線でもあるカレック山脈の奥地は人跡未踏の地とされていたが、そこで静かに瞑想し続ける少女がいた。そんな少女に語りかけるのは、人知を超えた存在――精霊。本来ならば人間には見えず、関わることなどまずありえなかったであろう精霊を、このエリーズという１３歳の少女は６歳の誕生日を境に知覚できるようになり、それゆえに両親から捨てられた彼女は１０歳のころから精霊の導きに従い、ここ――精霊いわく、〈天界、及び地上各地を結ぶ、精霊扉（スポット）と呼ばれる場

所〉――で過ごしながらその腕を磨いてきた。当初はたった1回の召喚で疲労困憊に陥っていた彼女もみるみる力をつけ、今では同時に数体召喚することも可能になり、それによって疲れるということも無くなっていた。

そして、魔王軍によって世界が危機に瀕した今、精霊たちはエリーズに出発（たびだち）を促した。彼女もそれに対して頷き、いくつもある扉の中のひとつに飛び込んだ。

夜が明けたらすぐにルトースを出て王都ホルッターを目指す――。しかし、そんな3人の思惑とは裏腹に、翌朝の日の出と同時にそれを待っていたかのごとくルトースの街に轟音が鳴り響き、3人は飛び起きた。

「なんだっ！？」

宿の部屋を飛び出したブルクハルトとレオポルドは、同じように隣の部屋から飛び出してきたベアトリクスと合流し、外――ルトースのメインストリートに出て行った。すると――

「ハハハハハ、アルペンハイムの生き残りども！　いるんだろう！？　さっさと出てこないと街が無くなっちまうぜ！」

ルトースの街の上空に魔族が浮かんでおり、そこからまるで雨のように火炎弾が降り注いでいた。いくつもの火炎弾の直撃を受けた街の中心部はすでに瓦礫の山と化しており、まだ辛うじて建っている建物もそこかしこで火災が発生し、住民がパニックを起こし、右往左往しているのが遠目にも確認できた。

「アイツは、フリードリヒさんの……行こう、これ以上街を破壊させてたまるかっ！」

ブルクハルトとベアトリクスにはその魔族に見覚えがあった。以前、ヴァイセンの街でブルクハルトたちの味方になっていた魔族フリードリヒを襲撃し、斃した魔族。名は――

「フン、やっとお出ましか。おれの名はイグニィド。ヴォルフリート様の右腕、親衛隊長だ。ヴォルフリート様不在の今はその代行も兼ねている。さあ、闘ろうぜ。シーバやバルドーレを斃した貴様らなら、少しはこのおれを楽しませてくれるんだろう？」

襲撃者――イグニィドはブルクハルトたちが出てきたのに気づくと、一旦攻撃を中断し、地面に下りてきてから名乗りを上げ、ニヤリと笑った。

「旧アルペンハイム王国軍近衛隊副隊長、ブルクハルト＝コルネリウスだ。行くぞっ！」

相手が名を名乗った以上、自分が名乗らないのは騎士として云々よりも、ひとりの戦士としての流儀に反すると考えたブルクハルトは自らも名を名乗り、剣を抜くとイグニィドに先制攻撃を仕掛けた。

「同じく、旧アルペンハイム王国の第一王女、ベアトリクス＝リアハイムこと、ベアトリーセ＝リア＝アルペンハイム、参りますっ！ブルッ、受け取りなさい！　“氷力補助（アシスト・アイス）”！」

剣を構えて走り出したブルクハルトめがけて、後方のベアトリクスもまた名乗りを上げると、青く輝く氷の魔力を放った。

「よしっ！　行くぞイグニィド！　受けてみろ、２人で再現した陛下の魔法剣、“氷結の魔法剣（アイシス・ブレイド）”！」

放たれた氷の魔力を剣で受け止め、冷気をまとった剣でブルクハルトは真正面からイグニィドに斬りかかった。

「ほう……なかなかやるじゃないか。――だが、甘い」

先ほどから炎を何発も放っていることから、イグニィドは炎を好み、また彼にとって氷は苦手な属性（もの）ではないか――そこを先ほどの街への攻撃の様子だけで見抜いた２人に素直な評価をしたイグニィドだったが、すぐにニヤリと笑うと、左手だけでブルクハルトの剣を受けとめ、氷の魔力を自らのまとう炎でかき消した。

「なっ！？」

一撃で大ダメージ、などと期待したわけではなかったが、ある程度のダメージを目論んだ攻撃を完全に殺され、ブルクハルトは動揺

した。
「フン、剣は折れなかったか。どうやらその剣、なかなかのものらしいな。だが、その程度の攻撃でこのおれを倒そうなんて、１００年早いな。貴様らが斃してきたシーバやバルドーレなどとは格が違うということ、その身に刻みつけて死んでいけっ！」
　自分たち魔族の堅い皮膚に斬りかかっても折れなかったブルクハルトの剣を見てわずかに驚いたような表情を見せたイグニィドは、一度体勢を立て直すべく後退するブルクハルトを追いかけるように接近すると、炎（フレイム・ナックル）をまとわせた拳で殴り飛ばした。
「ぐっ……」
　とっさに防御（ガード）しようとしたブルクハルトだったが、間に合わず腹にクリーンヒットをもらってしまった。それによって、ブルクハルトの身体は激しく吹き飛ばされ、瓦礫の山に頭から突っ込んだ。どうやらこの一撃で気を失ったのか、起き上がってくる様子は見られなかった。
「ブル！　くそっ、ベアはブルを頼む！　いくぞっ！」
　たったの一撃でダウンさせられたブルクハルトを心配しながらも、レオポルドが槍を構えて突撃した。
「フン、雑魚に用はない。消えろ」
　しかしイグニィドはロクにレオポルドのほうを見ることも無く、無造作に火球を投げつけた。
「ざ、雑魚だと！？　なめやが――うっ、速いっ！？　ちっ！　……うわあああっ！？」
　レオポルドはイグニィドの言葉に憤慨し、放たれた火球を避けて攻撃を仕掛けようとしたが、近づくにつれ加速していく火球を避けきれず、槍で薙ぎ払ってやり過ごそうとしたが、槍が火球に触れた瞬間、火球が弾け、レオポルドの全身が炎に包まれた。
「……バカめ、おれの炎は貴様ら人間ごときに防げるようなヤワなもんじゃねえんだよ。フン、これで２人、と。――ん？　ほう、まだ立ち上がるか」

黒こげになって地面に倒れゆくレオポルドにそこで初めて目をやったイグニィドがつぶやいたところで、ブルクハルトがベアトリクスの回復魔法を受けて再び立ち上がった。同時に、ブルクハルトの剣に再び氷の力が宿った。

「もう一度だっ！　行くぞ、“氷結の魔法剣（アイシス・ブレイド）”！」

「行きますわよっ、“大氷原（フロスト・フィールド）”！」

立ち上がった2人は今度はそれぞれに攻撃をしかけたが、

「ふん、効かぬな」

イグニィドは回避行動すら取ることもせず、真正面からブルクハルトの剣を受け止めて先ほどと同様に氷の力をかき消し、ベアトリクスの魔法は直撃したにも関わらず、ダメージらしいダメージを負った様子はなかった。

「つ、強い……」

全力の攻撃が通じず、2人の表情に焦りが見え始めた。

「――面倒だ。次の一撃で終わりにしよう。“炎の蛇（サーペント・ブレイズ）”」

その様子に、3人の実力を見切ったイグニィドは2人にトドメを刺すために、頭上に巨大な炎の蛇を生み出した。

「そ、そんな……なんて魔力なの……！？」

炎の蛇に練り込まれた魔力の密度に、ベアトリクスが恐怖で震えた。あまりの恐怖で、防御魔法を使うことさえできずにいた。

「くそ、ここまでなのか？　申し訳ありません、陛下……私は王女殿下を守れませんでした……」

魔法にそれほど詳しくないブルクハルトでも、その熱量からイグニィドが放とうとしている炎の蛇がどれほどの威力を秘めているかは理解できた。それだけに、もはや自分たちではどうにもならないことも悟り、亡き国王アルベルトの最後の命を果たせなかったことに対して悔し涙を流していた。――そんな涙さえすぐに蒸発してしまうような状態だったが。

「貴様らが死ねばもはや抵抗する者もいないだろう。後はじっくり料理していけばいい。じゃあな」

ロクに抵抗する様子を見せない2人の様子に諦めを感じ取ったイグニィドは勝利宣言にも取れる言葉を吐くと、炎の蛇を解き放った。蛇はまるで本物さながらの動きで2人に接近し、その周囲を取り囲んだ。完全に包囲された2人の周囲の酸素が消費され、呼吸困難に近い状態に陥った2人はガクリと膝をつき、倒れ伏した。と、そのとき。

「――行くよ、スノウ！」

戦場に謎の声が響いた直後、炎の蛇は跡形もなく消し飛ばされた。

１９．襲い来る強敵（前編）（後書き）

昨日更新予定なのをすっかり忘れてました、ごめんなさいｍ（＿）ｍ

再開早々にこんなミスをやらかす作者ですが、またよろしくお願いいたします。

20．襲い来る強敵（後編）～助っ人参戦～

（炎が、消えた……？）

朦朧とする意識の中、ベアトリクスは自分たちを取り囲んでいた炎の蛇が消滅したことを感じ取ったが、酸欠により起き上がることまではできず、誰が何をしたのかはわからずにいた。

「おれの炎を消し飛ばした、だと？　何者だ、貴様……！」

突然の闖入者によって攻撃を邪魔されたイグニィドは警戒心をあらわにして訊ねた。

「ボクの名はエリーズ。別に、そこで倒れてる人達とは何の縁もないし、両親に捨てられ、親戚にも見放されたボクにとってこんな世界がどうなろうと知ったことじゃないけれど、それはボクに力を貸してくれる精霊（とも）が悲しむからね。悪いけど、魔王軍には消えてもらうよ」

エリーズと名乗った少女は、倒れたままのベアトリクスたちとは無関係と主張したが、それでも闘う理由がある、とイグニィドに宣戦布告した。

「フン、おれの炎をたかが一度消し飛ばしただけで、いい気になるなよ。教えてやるよ、中途半端に力を身につけたヤツほど、早死にするってことをな……骨も残さず灰になれっ！　“大火炎（ラージ・ファイア）”」

自らの炎を消し飛ばしたエリーズの乱入に当初こそ驚いて警戒していたイグニィドだったが、よくよく見ると、彼女が年端も行かない子供だったことから警戒心を解いた。その上で、彼女を仕留めるのに吐息（ブレス）で焼き殺すことを選び、直撃すれば数秒と経たずに消し炭になりそうなほどの熱を持つ炎を吐きだした。

「あはは、キミは学習能力ってものがないのかな？　――まあ、それはそれで好都合だね。スノウ、よろしくね」

迫りくる炎にも全く慌てないどころか、むしろ笑っていたエリーズは、笑顔のままスノウに命令（ゴーサイン）を出した。

《――――》

冷気を自在に操る精霊、スノウは迫る炎を一瞥すると、軽く息を吹き出した。ただそれだけで、炎はその熱を失い、消滅した。

「な、なん……だと……？　ならば、おれと貴様、どちらの魔力が強いのか、我慢比べだ。――まさか、魔族以外にこの技を使うことになろうとはな。“獄炎（インフェルノ・フレイム）”」

明らかに手を抜いた状態の精霊にまたも炎を消されたイグニィドが静かに怒り、これまでは相手を見くびっていて使う必要性を感じないと思っていた強力なブレスをエリーズとスノウに向けて吐き出した。その炎は氷系の精霊であるスノウはもちろん、人間など一瞬で蒸発してしまうであろう威力と思われたが、またしてもスノウが少し強めの――人間で言う“ため息”程度――息を吐きかけただけで、簡単に消滅した。

「魔王の右腕と言っても、こんなものなのかな。うん、もういいや。スノウ、今度はこっちから仕掛けるよ」

《承知した。では、行くぞ。“氷柱落（アイシクル）とし”》

先ほどイグニィドがブルクハルトたちの戦闘能力に見切りをつけたシーンを見ていたわけではないが、偶然にも似たような状況をエリーズとスノウのコンビは作り出していた。主（エリーズ）の命に従い、イグニィドを仕留めるために初めてスノウが自ら攻勢に出た。彼女は巨大な氷柱を大量に作り出し、イグニィドへ投げつけた。

「な・め・る・な――――っ！」

イグニィドは咆哮をあげると、全身から炎の魔力を噴射して、迫りくる氷柱を溶かして防いだ。しかし、いくら溶かして防いでも次々に飛んでくる氷柱に、少しずつではあるがイグニィドに疲れが見え始めた。

「く、おのれ……」

疲れが見え始めたイグニィドは、防御のための炎の力が弱ってきた影響で、ダメージが蓄積し始めた。

《ふっ、もう終わりか？　意外とあっけなかったな。――死ね》

圧倒的な力の差でイグニィドを打ちのめし、先ほどまで魔王の右腕と豪語していた彼を嘲笑すると、スノウは右手に魔力を集中させて先ほどの氷柱よりも大きな球状の冷気の塊を作りだした。すると、そこから礫のごとく細かい氷が放たれ、イグニィドに襲いかかった。技の名は氷結弾雨（ブリザード・レイン）。偶然にもイグニィドがルトースを破壊した技、火炎弾雨（ファイア・レイン）の氷版と呼べる、よく似たものだった。

「うがっ……」

無数の氷の礫に打たれ、イグニィドは声も出なくなるほどのダメージを負っていた。しかし、最後の気力を振り絞って後方へ跳び、スノウの攻撃の威力を殺せるだけの距離を取った。

「あらら、離れちゃった。逃げちゃうかもしれないけど、良かったの？」

エリーズは基本的に精霊を喚んだ後は特にいちいち細かな指示は出さず、各精霊の判断で戦ってもらうスタンスを取っているが、それでも今のは気になったのか、スノウに訊ねた。

《ああ、問題ない。あそこまで傷めつければ、いつでもトドメは刺せるからな。逃げたとしても、我らの勝利に変わりはない》

それに対し、スノウは余裕の笑みを浮かべて言った。

（クソッ、どうにか生き延びたが、このまま戦闘を続けても今の状態ではおれに勝ち目はないな。悔しいが、一度退いて立て直すしかない、か）

スノウが余裕を見せて攻撃してこない間に、イグニィドは戦闘を継続するか、撤退するかを考えていたが、スノウとの圧倒的な力の差に撤退を決断した。

「そこのガキ、エリーズとか言ったか。悔しいが、今日のところはおれの負けだ。だが、貴様だけはどんな手を使っても必ず殺す。アルペンハイムの生き残りたちよりも最優先で、な。じゃあな、また会おうっ！」

イグニィドは捨て台詞を残すと、炎の弾丸を自分とスノウの間の地面に撃ち込むことで目くらまし代わりにして、魔王城へと撤退し

た。
「――あれ、本当に逃げちゃった。まあ、スノウの言うとおり、十分ボク達が押してたから何度来たって大丈夫だけどね。スノウ、ありがとう。ご苦労様」
逃走を決断したイグニィドに驚いたように目を丸くしながら、エリーズはスノウを労った。
《主、まだそちらの3人は息があるようだ。手当をしてやるといい》
スノウは逃げたイグニィドのことなどすでにどうでもいいのか、倒れているベアトリクスたちのほうを気にかける言葉を残して、消えた。
「あっ、うん。わかったよ。――来て、ブリンド」
スノウの残した最後の言葉のとおり、エリーズが倒れているブルクハルトたち3人のほうを見ると、3人とも重傷を負ってはいるものの、かすかなうめき声と身体の微動が確認でき、生きていることがわかった。直接の関係はないが、彼らもどうやら同じように魔王軍（イグニド）と戦っていたのだろう、と判断した彼女は、傷を癒す能力を有している風の精霊・ブリンドを喚んだ。
《おーぅ、呼んだかー？》
現れた精霊（ブリンド）は妙に軽い口調でエリーズに訊ねた。
「うん、そこで倒れている3人を治してあげてほしいの。よろしくね」
しかしエリーズはブリンドの口調など一切気にした様子もなく、それどころか自身も同じような口調――先ほどのスノウとは大違いだ――で指示を出した。
《あいよっと……ってこりゃまたずいぶんこっぴどくやられてんじゃねえか。まあ、生きてさえいれば治せねえ傷はねえから安心しな。そらよっと！》
ブリンドは頷いてから3人の様子を見て一瞬絶句したが、すぐさま調子を取り戻すと、3人を自らの能力である癒しの風（レストヒール・ウィンド）で包んだ。
さすがは“治せない傷はない”と豪語するだけあり、みるみる3人

の傷が癒えていく。
《うーし、こんなもんだろ。じきに目を覚ますはず。じゃあ、オイラは帰るぜ。またな》
やがて風が止むと、まだ3人とも倒れたままなのにも関わらず、ブリンドは消えてしまった。
「ん、もう……ブリンドってば相変わらずなんだから……。確かに3人のケガも治ってるし、やることはきちんとやってくれるからいいんだけど、もう少し他の精霊（みんな）を見習ってほしいものだわ……」
少しものぐさで、‘仕事’を終えるとすぐにいなくなるブリンドにエリーズは苦笑していた。すると、
「うっ……」
意識を取り戻したブルクハルトがまず頭を押さえながら起き上がった。続けて、ベアトリクスとレオポルドもゆっくりと身体を起こした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6850q/

亡国の姫君

2011年9月25日01時34分発行